

外国語の「目標」、 「学びに向かう力・人間性等」について



1. 外国語を学ぶ意義

- ・ AI時代に外国語を学ぶ意義の再定義と、外国語の「見方・考え方」の見直し

2. 目標・内容の一層の構造化

- ・ 「学びに向かう力・人間性等」の整理等を踏まえた目標の示し方
- ・ 「高次の資質・能力」（「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」）を中心とした内容の一層の構造化

3. 発信力強化

（1）グローバル・多文化共生社会の担い手の育成 （外国語で他者とコミュニケーションを図る意欲等の育成）

- ・ 英語を学ぶ動機付けや児童生徒の目標設定の在り方
- ・ 動機付けを強化するための話題・活動の在り方

（2）英語の使い手の育成（英語運用能力の育成）

- ・ 校種間接続の課題等を踏まえた指導内容（話題・活動等）の段階的な示し方
- ・ 5領域の活動を通じた知識及び技能の指導の在り方（語彙や文法の指導を含む）
- ・ 科学的知見を踏まえた学習プロセスを意識した指導の在り方
- ・ 高等学校の科目（特に「論理・表現」）の在り方
- ・ AIを含むデジタル学習基盤の活用の在り方

4. 児童生徒の英語力の把握・評価

- ・ 「学びに向かう力、人間性等」の評価の新しい整理を踏まえた評価等の在り方

5. 柔軟な教育課程

- ・ 義務教育における調整授業時数制度や高校における科目の柔軟な組み替えや履修の免除を可能とする仕組みを前提とした場合に、考えられる教育課程・学習指導の工夫の在り方

6. 指導体制・環境整備等

- ・ AI時代の教師・ALT等の役割の再定義
- ・ 教員の資質（英語力・授業力）向上のための方策と、ALT等との連携の在り方
- ・ 外国語を使う機会の充実の在り方

7. 英語運用能力に関する社会全体の課題

- ・ 英語運用能力に関する社会全体の課題と、学校教育において取りうる対応の方向性

8. 英語以外の外国語

- ・ 英語以外の外国語の推進方策



1. AI時代に外国語を学ぶ意義の再定義と、 外国語の「見方・考え方」の見直し

AI時代に外国語を必修とする「本質的意義」の再整理 (Ver.2)

－ 自らの人生を舵取りできる、多様な他者と協働できる資質・能力への貢献の観点から －

1. 言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を育むこと

● 異なる言語・文化への理解を促す

- 自らと異なる他者の言語や文化等との接触・理解・共感・受容
- 言語習得の困難の経験による外国人や日本語学習者の立場・心情の理解
- ➡ 以上が相まって、多様な主張や価値観への寛容性を生み、多様性の包摂や多文化共生に対する理解を促す可能性

● 母語や自国の文化のメタ認知を促す

- 外国語と対比されることにより、母語の特徴や良さの認知に繋がる
- 外国の文化と対比されることにより、自国の文化への理解が深まる
- 外国人に伝えるため、自国の歴史・文化を学ぶ動機付けが促される

● コミュニケーションへの深い理解を促す

- ミスコミュニケーション等を通じた相手の言葉や意図の受け止め方への意識向上（聞く・読む）
- 相手や相手の文化への配慮、コミュニケーションの目的、場面や状況等に応じた表現、自分の言葉の分かりやすさへの意識向上（「やさしい日本語」にも繋がる）（話す・書く）
- 伝わらないもどかしさを乗り越えるレジリエンスや伝わることによる自己肯定感等の高まり、それらを行き来する経験
- ノンバーバル・コミュニケーションの重要性の理解（アイコンタクト、間の取り方、身振り・手振り等）
- ➡ 以上が相まって、翻訳ツール等によるやり取りを超えた、生身の身体を有する人間同士のリアルなコミュニケーションへの関心・意欲を促す可能性

2. 自分の考えが磨かれて思考が深まる、人間関係が豊かになること

● 外国語を介して、自分の考え・意見の形成・整理が促進される

- 外国語を通じて流通する多様な主張や価値観、感性への接触・受容
- 外国語で対話・協働するために、普段から自分の考え・意見を整理したり、外国語ならではの論理展開で伝える意識が向上する
- 外国人に伝えるため、自国の歴史・文化を学ぶ動機付けが促される（再掲）
- ➡ アウトプットを意識した効果的インプットや論理的思考力の伸長を促す可能性

● 人間関係の質・量が豊かになり、得られる情報も増える

- 世界中の様々な人々と直接つながり、信頼関係の構築が可能となる
- 人間同士のリアルなコミュニケーションにより、翻訳やAIを介する場合と比べて得られる情報が格段に広がり、多面的視野に繋がる
- 異なる言語でのコミュニケーションを通じて新たな自分を発見できたり、より広い視野から自分の好き・得意を考えたり、将来の選択肢が広がる可能性も

※これらは外国語を学校教育で必修とすることの意義を卒業後も継続的に学習した場合も想定しながら整理したものであり、これらの全てが、全ての児童生徒において、初等中等教育の過程で高いレベルで発現すると考えているものではない

※AI技術が今後も予想を超える速さで進歩することを踏まえると、AIに代替されるべきではない、人間に残したい部分は何かを重視する必要（下線部分）

※以上のほか、現在のAI技術を前提とした場合ではあるが、AIにより手軽に翻訳・通訳が可能となる中であっても、出力の正確性・適切性を一定程度判断したり、ツールの力も使いつつも、リアルなコミュニケーションを行ったりするためには相応の英語力が必要という視点もある

よりよい社会 (社会のウェルビーイング)

- 多様性の包摂、国内外の多様な他者との共生・共創
- グローバルな視点・情報を駆使した価値創造・課題解決
- 持続可能な民主主義・平和な社会の構築

幸福な人生 (個人のウェルビーイング)

- 国内外の多様な他者と直に意思疎通できる安心感・自信、豊かな人間関係
- 言葉の壁や国境を越えて自らの人生を舵取り（進学・留学・就職）
- 思考の多様性・柔軟性、価値観の再構築

外国語の新たな「見方・考え方」のイメージ（案）（Ver.2）

現状

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、

見方

社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、

考え方

コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること（101字）

（参考：解説）

見方

外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉えるとは、**外国語で他者とコミュニケーションを行うには、社会や世界との関わりの中で事象を捉えたり、外国語やその背景にある文化を理解するなどして相手に十分配慮したりすることが重要**であることを示している。

考え方

また、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築することとは、多様な人々との対話の中で、目的や場面、状況等に応じて、既習のものも含めて習得した概念（知識）を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、課題を見いだして解決策を考えたり、身に付けた思考力を発揮させたりすることであり、「外国語で表現し伝え合う」ためには、適切な言語材料を活用し、思考・判断して情報を整理するとともに、**自分の考えなどを形成、再構築することが重要**であることを示している。

外国語によるコミュニケーションの一連の過程を通して、このような「見方・考え方」を働かせながら、自分の思いや考えを表現することなどを通じて、生徒の発達の段階に応じて「見方・考え方」を豊かにすることが重要である。この「見方・考え方」を確かめ豊かなものとすることで、学ぶことの意味と自分の生活、人生や社会、世界の在り方を主体的に結び付ける学びが実現され、学校で学ぶ内容が、生きて働く力として育まれることになる。さらに、こうした学びの過程が外国語教育の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につながる。その鍵となるものが、教科等の特質に応じた「見方・考え方」である。

（参考）第2回提示イメージ

「外国語及び外国語によるコミュニケーションを、社会、文化の違いや相手との関わりに着目して捉え、多様な他者に対話し、相互理解を図るため、主体的に自分の意見等を形成し、表現等を工夫して発信すること」

改善イメージ

外国語及び外国語によるコミュニケーションを

見方

文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、

考え方

自分の考え等を形成するとともに表現等を工夫して発信し、多様な他者との相互理解を図ること（89字）

※解説は前ページの「本質的な意義」を踏まえて作成

※今後の「目標」・「内容」等の検討や総則・評価特別部会等での全体の調整も踏まえて引き続き検討。

(参考)「本質的意義」の再整理を踏まえた「見方・考え方」と「目標」の検討の方向性 (たたき台)

「本質的意義」の要素については、「見方・考え方」と「目標」のみならず、本質的意義の要素は引き続き「内容」等の検討においても各趣旨を反映していくこととしてはどうか。

1. 言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を育むこと

● 異なる言語・文化への理解を促す

- 自らと異なる他者の言語や文化等との接触・理解・共感・受容
⇒ **見方・考え方と目標** (学びに向かう力・人間性等) を中心に反映してはどうか
- 言語習得の困難の経験による外国人や日本語学習者の立場・心情の理解
⇒ **上記の理解が促されるよう、内容 (話題や活動)** を工夫してはどうか
- ➡ 以上が相まって、多様な主張や価値観への寛容性を生み、多様性の包摂や多文化共生に対する理解を促す可能性

● 母語や自国の文化のメタ認知を促す

- 外国語と対比されることにより、母語の特徴や良さの認知に繋がる
⇒ **見方・考え方と内容 (話題や活動)** を中心に反映してはどうか
- 外国の文化と対比されることにより、自国の文化への理解が深まる
⇒ **見方・考え方と内容 (話題や活動)** を中心に反映してはどうか
- 外国人に伝えるため、自国の歴史・文化を学ぶ動機付けが促される
⇒ **動機付けが促されるよう、内容 (話題や活動)** を検討してはどうか

● コミュニケーションへの深い理解を促す ⇒ 全体として **見方・考え方** に反映してはどうか

- ミスコミュニケーション等を通じた相手の言葉や意図の受け止め方への意識向上 (聞く・読む)
⇒ **目標 (思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力・人間性等)** を中心に反映してはどうか
- 相手や相手の文化への配慮、コミュニケーションの目的、場面や状況等に応じた表現、自分の言葉の分かりやすさへの意識向上 (「やさしい日本語」にも繋がる) (話す・書く)
⇒ **目標 (思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力・人間性等)** を中心に反映してはどうか
- 伝わらないもどかしさを乗り越えるレジリエンスや伝えることによる自己肯定感等の高まり、それらを行き来する経験
⇒ **目標 (学びに向かう力・人間性等)** を中心に反映してはどうか
- ノンバーバル・コミュニケーションの重要性の理解 (アイコンタクト、間の取り方、身振り・手振り 等)
⇒ **内容 (言語の働き、言語活動の解説等)** を中心に反映してはどうか
- ➡ 以上が相まって、翻訳ツール等によるやり取りを超えた、生身の身体を有する人間同士のリアルなコミュニケーションへの関心・意欲を促す可能性

2. 自分の考えが磨かれて思考が深まる、人間関係が豊かになること

● 外国語を介して、自分の考え・意見の形成・整理が促進される

- 外国語を通じて流通する多様な主張や価値観、感性への接触・受容
⇒ **見方・考え方と目標 (思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力・人間性等)** を中心に反映してはどうか
- 外国語で対話・協働するために、普段から自分の考え・意見を整理したり、外国語ならではの論理展開で伝える意識が向上する
⇒ **見方・考え方と目標 (思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力・人間性等)** を中心に反映してはどうか
- 外国人に伝えるため、自国の歴史・文化を学ぶ動機付けが促される (再掲)
⇒ **動機付けが促されるよう、内容 (話題や活動)** を検討してはどうか
- ➡ アウトプットを意識した効果的インプットや論理的思考力の伸長を促す可能性

● 人間関係の質・量が豊かになり、得られる情報も増える

⇒ 全体として **見方・考え方によって導かれるもの** として整理してはどうか

- 世界中の様々な人々と直接つながり、信頼関係の構築が可能となる
- 人間同士のリアルなコミュニケーションにより、翻訳やAIを介する場合と比べて得られる情報が格段に広がり、多面的視野に繋がる
- 異なる言語でのコミュニケーションを通じて新たな自分を発見できたり、より広い視野から自分の好き・得意を考えたり、将来の選択肢が広がる可能性も
(⇒ **児童生徒がこれらを実感できるように内容 (話題や活動)** を検討してはどうか)



2. 「学びに向かう力・人間性等」の整理等 を踏まえた目標の示し方

外国語の「目標」、「学びに向かう力・人間性等」

【現状と課題】

「目標」

- 現行の外国語の目標は、小・中・高で一貫した目標を定め、育成を目指す資質・能力が段階的に高度化することをわかりやすく示す役割を担っている
- 一方、外国語を含め、各教科等の目標の柱書には、
 - ① 見方・考え方、
 - ② 教科に特徴的な活動、
 - ③ 資質・能力の趣旨が記載されており、冗長で分かりにくいとの指摘
- 総則・評価特別部会で示された方向性を踏まえ、育成したい資質・能力の趣旨や固有の学習過程を端的に示す必要

「学びに向かう力・人間性等」

- 論点整理では、「学びに向かう力、人間性等」について、主要な要素や要素間の関係を構造化して分かりやすく示す観点から、4つの要素により整理する方向性が示された
- 「学びに向かう力・人間性等」は、学習指導要領の「内容」に原則として記載がなく、学習評価に当たっては教科等の「目標」を踏まえて行うこととなるため、そうした点も踏まえた「目標」の書きぶりが重要

※「英語」の目標については、内容の構造化と併せて検討予定

【方向性と具体的論点（案）】

「目標」

- 論点整理や総則・評価特別部会で示された方向性を踏まえつつ、AI時代に外国語を学ぶ本質的意義の要素や、外国語における新たな「見方・考え方」も踏まえて見直すべき点を検討するべきではないか
- その際、以下の点に留意すべきではないか
 - ・ 校種間の接続・連携が引き続き重要であることを踏まえ、現在の目標が担っている学校種の段階的な高度化を示す役割は、引き続き維持すべきではないか
 - ・ まずは、現行の記載をベースとして、見直すべき要素を検討し、今後の「高次の資質・能力」や内容の構造化の検討を踏まえて、目標に示すべき事項の内容や粒度について調整してはどうか

「学びに向かう力・人間性等」

- 外国語の観点から主要な4要素の例を整理するとともに、
 - ① 当該教科等の学習で育みたい学びや生活に向かう態度
 - ② 当該教科等の学習で育みたい情意・感性の要素を分かりやすく示し、学校種の段階に応じて書きぶりを検討するべきではないか

1. 見方・考え方を含む目標の柱書きの示し方と改善の方向性

【現行】各教科等の目標の柱書（例：中学校国語）

言葉による見方・考え方を働かせ（**見方・考え方**）、言語活動を通して（**学習過程**）、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力（**資質・能力の趣旨**）を次のとおり育成することを目指す

【現行の解説】見方・考え方の記述

「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」

＜現行の記述ぶりの課題＞

- 現在、各教科等の目標の柱書には、①見方・考え方、②教科に特徴的な活動、③資質・能力の趣旨が記載されており、冗長で分かりにくいとの指摘。一方、特に「見方・考え方」の具体は解説に落とされており、併せて読まないといけない。

＜論点整理で示されたこと＞

- 論点整理では、「見方・考え方」を、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核に焦点化した上で、その具体を、解説ではなく学習指導要領本体に位置付ける方向性を示している
- また、論点整理では、「見方・考え方」の意義について、「教科固有の様々な世の中を見る視点や考え方が豊かになることで、徐々に資質・能力の育成を導く」といった観点だけでなく、「よりよい社会や幸福な人生に繋げる」とも位置付けており、学校教育のみならず、その後の人生でも豊かに働くことを視野に入れている

分かりやすく、使いやすいを目指す上で

- 特定の学校種・教科で育成したい資質・能力の趣旨等を端的に表す目標の柱書に、卒業後まで視野に入れた見方・考え方まで含めて書き下すと焦点が定まらなくなる
- 目標の柱書は、育成したい資質・能力の趣旨や固有の学習過程を端的に示すべきであり、見方・考え方は、目標直下に別途欄を設け記載してはどうか

2. 1.を踏まえた書きぶり（イメージ）

（目標）

● ● する資質・能力（**資質・能力の趣旨**）について、● ● することなどを通して（**学習過程**）、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
--------	--------------	--------------

（見方・考え方）

● ● （当該教科で扱う事象や対象）を● ● （当該教科固有の物事を捉える視点）の視点から捉え（に着目して捉え）、● ● （当該教科固有の考え方や判断の仕方）すること。

（見方・考え方を含める要素）

- 見方・考え方については、以下のような要素を含めることを基本に、各教科等の特質に応じて検討してはどうか
 - ① 当該教科等が扱う事象や対象
 - ② 当該教科固有の物事を捉える視点
 - ③ 当該教科固有の考え方や判断の仕方
- これらの要素を示す事により、教師が児童生徒の学習・指導を構想する際に「教科の本質を外していないか」を確かめられるものとなっているかという視点を大切にすることが重要ではないか

（見方・考え方の書きぶりに共通する留意事項）

- これまで各教科等の見方・考え方の書きぶりで示していた各教科等の深まりの鍵を示す部分は、構造化により示す中核的な概念等を通じて示すこととしているため、新たな見方・考え方の書きぶりについては現在よりも短く端的に示すことを基本としてはどうか
- 当該教科等を学ぶ本質的な意義の中核をわかりやすく示す観点からは、経験の浅い教師が読んでも端的に理解可能な記述となっているかという視点を重視して示し方を検討してはどうか（学習・指導を通じて、最終的に児童生徒が意識できるかという点も留意）

教育課程企画特別部会での議論を踏まえた新たな「目標」の考え方

※中学校外国語をイメージに作成

現状

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

改善イメージ

●●する資質・能力（資質・能力の趣旨）について、●●することなどを通して（学習過程）、次のとおり育成することを目指す。①スライド10参照

知識及び技能

②スライド11参照

思考力、判断力、表現力等

③スライド12参照

学びに向かう力・人間性等

④スライド14～16参照

（参考：現行の解説）

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉えるとは、外国語で他者とコミュニケーションを行うには、社会や世界との関わりの中で事象を捉えたり、外国語やその背景にある文化を理解するなどして相手に十分配慮したりすることが重要であることを示している。

（略）「外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して」とは、教科の目標を実現するために必要な指導事項について述べたものであり、本解説第2章第2節2（3）で詳細を解説する。

※本解説第2章第2節2（3）では、「思考力、判断力、表現力等」を育成するに当たり、「知識及び技能」に示す事項を活用して、英語の目標に掲げられた5領域ごとの具体的な「言語活動に関する事項」に示された言語活動を通して指導することや、「言語の働きに関する事項」を適切に取り上げて指導が行われる必要があることを整理している。

「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」が外国語科の目標の中心となる部分である。外国語の音声や文字を使って実際にコミュニケーションを図る資質・能力であり、

・理解する ・表現する ・伝え合う

という三つの要素に整理した。「理解する」、「表現する」という単に受け手となったり送り手となったりする単方向のコミュニケーションだけでなく、「伝え合う」という双方向のコミュニケーションも重視している。

目標における柱書のイメージ（案）

- 学校種の段階的な高度化は3つの資質・能力の目標において具体的に示すこととし、柱書においては、小学校の外国語活動と小中高の外国語科との違いや各校種の共通点と相違点を踏まえて端的に記載してはどうか
- 学習過程の書きぶりについては、今回の議論の対象とはせず、5領域の活動を通した指導の在り方、活動と練習等との関係、英語使用と母語使用の関係等も含め、改めて議論してはどうか

現状

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による <u>聞くこと、話すこと</u> の言語活動を通して、 <u>コミュニケーションを図る素地となる資質・能力</u> を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による <u>聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと</u> の言語活動を通して、 <u>コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力</u> を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による <u>聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと</u> の言語活動を通して、 <u>簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力</u> を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による <u>聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと</u> の言語活動及びこれらをつなげた統合的な言語活動を通して、 <u>情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力</u> を次のとおり育成することを目指す。

（参考） ●●する資質・能力（資質・能力の趣旨）について、●●することなどを通して（学習過程）、次のとおり育成することを目指す。

改善イメージ

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語による <u>コミュニケーションを図る素地となる資質・能力</u> を、 [P] 聞くこと、話すことの言語活動を通して、次のとおり育成することを目指す。	外国語による <u>コミュニケーションを図る資質・能力</u> を、 [P] 聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、次のとおり育成することを目指す。		外国語による <u>コミュニケーションを図る資質・能力</u> を、 [P] 聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと及びこれらをつなげた統合的な言語活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

見方・考え方
（暫定案）

[P]外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、自分の考え等を形成するとともに表現等を工夫して発信し、多様な他者との相互理解を図ること

目標における「知識及び技能」のイメージ（案）

- 端的に記載する観点から、**小学校**における**日本語と外国語との違い**、**各校種**における**4技能**に関する記述は、目標からは**省略してはどうか**
- **中学校、高等学校**においては、小学校との接続の観点から、「**文構造**」を明示してはどうか
- **高等学校**においては、「**目的や場面、状況などに応じて**」の趣旨は「**実際のコミュニケーションにおいて**」に含まれていると考えられるとともに、明示されていることで思考力、判断力、表現力等との違いが分かりにくいという指摘があることから、**省略してはどうか**

現状

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、 日本語と外国語との音声の違い等に気付く とともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、 日本語と外国語との違いに気付く 、これらの知識を理解するとともに、 読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付ける ようにする。	外国語の音声や語彙、表現、 文法 、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、 聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能 を身に付けるようにする。	外国語の音声や語彙、表現、 文法 、言語の働きなどの 理解を深めるとともに 、これらの知識を、 聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付ける ようにする。



改善イメージ

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどを理解するとともに、 実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付ける ようにする。	外国語の音声や語彙、表現、 文構造 、文法、言語の働きなどを理解するとともに、 これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付ける ようにする。	外国語の音声や語彙、表現、 文構造 、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、 これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて適切に活用できる技能を身に付ける ようにする。

目標における「思考力、判断力、表現力等」のイメージ（案）

- 本質的意義のうち、「相手の言葉や意図の受け止め方への意識」、「自分の言葉の分かりやすさへの意識」の要素は、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などにおいて」（小外国語・中・高）で表せているか
- 本質的意義のうち、「多様な主張や価値観への接触・受容」「外国語ならではの論理展開で伝える意識」の要素は、「外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う」（中）、「外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う」（高）等で表せているか
- 小学校においては、読んだり書いたりする際に意識すべき事項について、端的に記載する観点から省略してはどうか
- 中学校においては、取り扱う話題について、日常的な話題や社会的な話題に限定せずに、「様々な話題」としてはどうか
その上で高等学校においては、「幅広い話題」としてはどうか

現状

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	<u>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。</u>	<u>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</u>	<u>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</u>

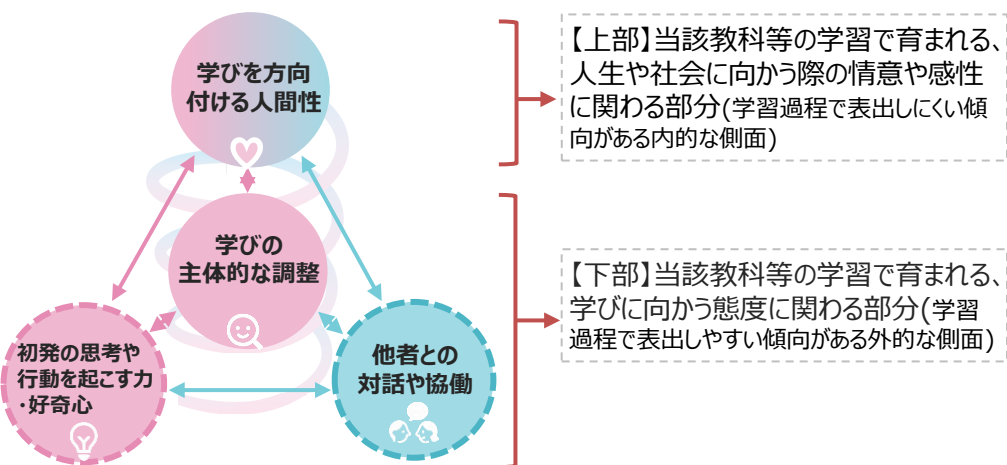
改善イメージ

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	<u>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ語彙や基本的な表現を読んだり書いたりして伝え合うことができる基礎的な力を養う。</u>	<u>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、様々な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</u>	<u>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</u>

※今後の「内容」等の検討や総則・評価特別部会等での全体の調整も踏まえて引き続き検討。

1. 論点整理で示された方向性及び企画特別部会での議論

- 論点整理では、「学びに向かう力・人間性等」について、主要な要素や要素間の関係を構造化して分かりやすく示す観点から、下記の4つの要素により整理する方向性が示された
- 企画特別部会における議論の過程では、「学びに向かう力・人間性等」が単によりよい知の獲得に向けた力としてのみ捉えられてはならず、学習したことを踏まえて人生や社会に向かう際の情意・感性に係る側面も重視すべきとの強い意見があった



- また、論点整理では、「学びに向かう力・人間性等」の学習評価に関し、個人内評価を基本とした上で、学びに向かう態度に関わる下部の3要素については、学習評価において、「思考・判断・表現」の過程で特に表出した場合には「○」をつける方向で検討するとされている
- 「学びに向かう力・人間性等」は、学習指導要領の「内容」に原則として記載がなく、学習評価に当たっては教科等の「目標」を踏まえて行うこととなるため、そうした点も踏まえた「目標」の書きぶりが重要

※ 現行、各教科等において育成する「学びに向かう力・人間性等」は、個別の学習内容に応じて異なることが想定されにくいため、原則として各教科等の「目標」水準でのみ記載されている。こうした性質は、今回の論点整理に伴って変わるものではない。

2. 1. を踏まえた目標における書きぶり

- 1. を踏まえると、「学びに向かう力・人間性等」の目標については、全ての要素を個別に盛り込もうとすることで冗長となることを避けつつ、以下の2つの要素をバランス良く含めることとしてはどうか

① 当該教科等の学習で育みたい学びや生活に向かう態度

学びにおいて、好奇心を持って初発の思考や行動を起こし、他者との対話や協働を経ながら、学びを主体的に調整し、次の思考や行動に繋げていく態度について、教科固有の学習過程を踏まえた言葉で示す
(現行の例：自然の事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度（中・理科）)
→ 学びに向かう態度に係る3つの要素を踏まえた見直し

② 当該教科等の学習で育みたい情意・感性

人生や社会との関わりにおいて育みたい情意や感性を示す
(現行の例：自然を愛する心情（小・理科）、明るく豊かな生活を営む態度（中・体育）など)

- 一方、現行でも、複数分野を有する社会科など、多くの内容が盛り込まれ目標の書きぶりが複雑な教科もある中、分かりやすく使いやすい学習指導要領を目指す上では、今回の見直しで一層複雑となることは避ける必要
- こうしたことを踏まえ、目標については、表形式となることも踏まえ、箇条書きも利用して分かりやすく構造化することを可能としてはどうか（この点は知識及び技能、思考力、判断力、表現力等の目標も同様）

外国語における「学びに向かう力・人間性等」の4要素の例（たたき台）

変化が激しい不確実な社会の中で、学びを通じて自分の人生を舵取りし、社会の中で多様な他者とともに生きる力を育む

③（例）

- 外国語を身に付けることによる自己イメージを持ち、自己イメージと現実とのギャップを埋めようとする
- 聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮し、状況に応じて修正する
- 自らのコミュニケーションを省察してより良い表現を考える等、次の機会に向けて準備をする
- 外国語や外国の文化との比較を通じて母語の影響を受けた表現や思考の癖等に気づき、必要な修正に繋げる

①（例）

- 外国語や外国語によるコミュニケーション、自らと異なる他者の文化等に対して興味・関心を持つ
- 自分の考え・意見を持ち、外国語で伝えようとする

学びを方向付ける人間性

思考や行動を自身の豊かな人生やより良い社会に向けていく人間性

※民主主義、共生社会、持続可能な社会、環境、個人と社会のウェルビーイング、アイデンティティ、エージェンシー等と関連

学びの主体的な調整

自分の思考や行動を客観的に把握し認識（メタ認知）しながら学習を自己調整し、思考や行動を修正したり次の思考や行動に繋げたりする力

初発の思考や行動を起こす力・好奇心

各教科等で育成された知識及び技能、思考力、判断力、表現力等を土台として、初発的な思考や行動を起こす力

※創造性等と関連

④（例）

- 目的意識をもって外国語の学習に継続して取り組もうとする
- 外国語を学ぶ困難の経験を多様性の包摂や多文化共生に対する理解に繋げる
- 伝わらないもどかしさや伝わる自己肯定感の高まり等を経験しながら人間同士のコミュニケーションへの意欲を高める
- 外国語によるコミュニケーションを継続し、対話を通して多様な他者と信頼関係を構築する
- 外国語の使用を通じて新たな価値を創造したり課題を解決したりする

②（例）

- 他者との違いを知り、相互理解を深める
- 対話や協働を通じて、多様な主張や価値観、感性に触れ、自らの考えを広げる・深める

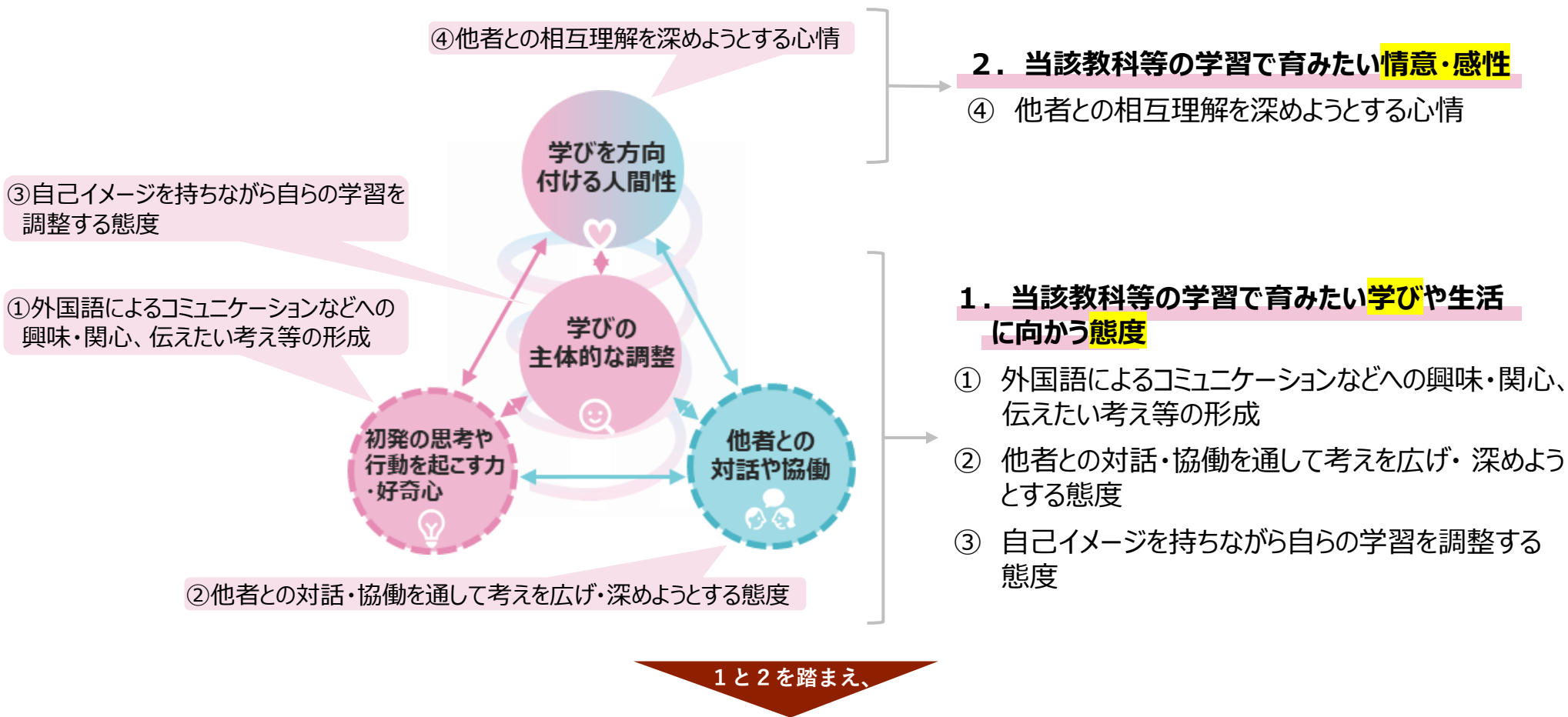
他者との対話や協働

教師の指導を含む他者からのフィードバック、書籍等との対話、多様な他者との協働・共感や対立の乗り越え等を通じて学びを支える態度

※上記例は今後の議論を踏まえて見直していく予定

学びに向かう力、人間性の高まり

外国語における「学びに向かう力・人間性等」の整理（案）



【中学校外国語でのイメージ】

外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち（①）、学習を自ら調整し（③）、対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、他者との相互理解を深めようとする態度（①・②・④）を養う。

※解説は前ページや3ページの「本質的な意義」も踏まえて作成

※今後の「内容」等の検討や総則・評価特別部会等での全体の調整も踏まえて引き続き検討。

目標における「学びに向かう力、人間性等」のイメージ（案）

現状

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、 <u>他者</u> に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、 <u>聞き手、読み手、話し手、書き手</u> に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、 <u>自律的</u> に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。



改善イメージ

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、粘り強く自分の考えや気持ちを伝えるとともに、相手を理解しようとする態度を養う。	外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、 <u>学習を自ら調整し、対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、他者との相互理解を図ろうとする態度を養う。</u>	外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、 <u>学習を自ら調整し、対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、他者との相互理解を深めようとする態度を養う。</u>	外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、 <u>学習を自ら調整し、対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、他者との相互理解を深め、外国語の習得に継続して取り組もうとする態度を養う。</u>

(参考) 学校種毎の目標の示し方

小学校・外国語活動

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能

外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、**日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに**、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。

思考力、判断力、表現力等

身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。

学びに向かう力、人間性等

外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

外国語によるコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を、**【P】**聞くこと、話すことの言語活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能

外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。

思考力、判断力、表現力等

身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。

学びに向かう力、人間性等

外国語を用いてコミュニケーションを図ることなどに興味・関心を持ち、粘り強く自分の考えや気持ちを伝えるとともに、相手を理解しようとする態度を養う。

小学校・外国語

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能

外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、**日本語と外国語との違いに気付き**、これらの知識を理解するとともに、**読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる**実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

思考力、判断力、表現力等

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ**外国語の**語彙や基本的な表現を**推測しながら**読んだり、**語順を意識しながら**書いたりして、**自分の考えや気持ちなどを**伝え合うことができる基礎的な力を養う。

学びに向かう力、人間性等

外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を、**【P】**聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能

外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどを理解するとともに、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

思考力、判断力、表現力等

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、**様々な話題**について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

学びに向かう力、人間性等

外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、学習を自ら調整し、**対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、他者との相互理解を図ろうとする態度を養う。**

中学校

現状

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能

外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、**聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと**による実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。

思考力、判断力、表現力等

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、**日常的な話題や社会的な話題**について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

学びに向かう力、人間性等

外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

改善イメージ

外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を、**[P]**聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能

外国語の音声や語彙、表現、**文構造**、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。

思考力、判断力、表現力等

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、**様々な話題**について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

学びに向かう力、人間性等

外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、学習を自ら調整し、**対話・協働**を通して考えを広げたり深めたりするとともに、**他者との相互理解**を深めようとする態度を養う。

高等学校

現状

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能

外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、**聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと**による実際のコミュニケーションにおいて、**目的や場面、状況など**に応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。

思考力、判断力、表現力等

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、**日常的な話題や社会的な話題**について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

学びに向かう力、人間性等

外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

改善イメージ

外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を、**【P】聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと及びこれらを結び付けた統合的な言語活動**を通して、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能

外国語の音声や語彙、表現、**文構造**、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて**適切**に活用できる技能を身に付けるようにする。

思考力、判断力、表現力等

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、**幅広い話題**について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う

学びに向かう力、人間性等

外国語によるコミュニケーションなどに**興味・関心**を持ち、学習を自ら調整し、**対話・協働**を通して考えを広げたり深めたりするとともに、**他者との相互理解を深め、外国語の習得に継続して取り組もうとする態度**を養う。

**(参考) 英語運用能力に関する社会全体の課題と
学校教育における対応の方向性**

英語運用能力に関する社会全体の課題と学校教育における対応の方向 (Ver.2)

社会の期待・認識



10年も習ったのに
英語が話せるようにならない...

ギャップを少しでも埋めるためにできることは？

学校で改善できること

コミュニケーション重視の授業
改善を行ってきているが...



ギャップが生まれる背景

授業時間の
制約

卒業後の
学習状況

社会環境・社会の認識

- **必要な学習時間は到達したい水準で異なり、学校教育だけでは時間に限界**
(英語話者が日本語の一般的な専門能力を身につけるために必要な授業時間数は2,200時間※。日本の小中高の外国語の授業時間は600～1,000時間程度。)
- **高校卒業後の伸びが少なく、学習を継続していても具体的な目標設定や学習方略がない場合が多い**
(英語の学び方がわからず、自分の目標との関係で習得すべき語彙や、どのような学習がどれだけ必要なのか意識されていない。関連して、大学教育を通じても外国語を使う力が身に付いたと実感できていないとの調査結果も。)
- **英語を頻繁に使わざるを得ない環境がなく、社会全体で切迫感や学習動機が弱い**
(学校で学んだことを学校外で自然に使う機会はほとんどない社会的環境が言語習得の観点で不利であるとの共通認識が必要。AIの発展により、学習動機は更に弱まる可能性。)
- **「英語が話せない」原因は「英語で伝える内容が十分整理されていない」等の場合も**
(自分の意見が母語で十分言語化されていない、国際交流で必須となる自分の国や地域に関する発信型インプットが少ない、自分の考えを伝えるのが苦手)
- **学校英語＝受験英語＝使えない英語との社会の認識**
(コミュニケーション重視の授業改善を図ってきており、大学入試も変わってきているが、効果的な指導法がわからないなど更なる改善の余地。)

学校教育での対応の方向性 (案)

- **目的に応じて多様な到達水準があることや授業時間の限界を踏まえた上で、身に付けたい英語力についての自己イメージを持つことを促してはどうか**
(例: 英語を学ぶ多様な意義の再整理、児童生徒が英語を身に付けたい程度や英語を使用して取り組みたいことについて自己イメージを持つことを意識した活動の充実(キャリア教育との連携を含む) 等)
- **自律的学習者を育てる方向で、授業デザイン・指導方法の改善を図ってはどうか**
(例: 心理的安全性が確保された授業・学校づくり、AIも活用した「恥ずかしがらない」練習量の大幅な増加、AIを活用した児童生徒に応じた教材作成、第二言語習得や学習科学の知見の活用、家庭学習との効果的な連携、継続学習を可能とする学習方略 等)
- **AI時代に英語を学ぶ動機付けを高める機会を授業内外で多層的に充実する観点から、先行事例の成果を共有し、各地方における取組を積極的に推進してはどうか**
(例: 教師・ALT等の連携促進、国内外の英語を使う人との交流、英語キャンプ、海外校との交流、英語での探究、海外留学 等)
※教育委員会と首長部局との連携を含む
- **英語で伝えたい内容を個々の児童生徒が育む活動を充実してはどうか**
(例: AIや学校内外での交流機会を活用しつつ、自分が本当に伝えたいことや自分が生まれ育った国・地域のことを伝える活動の強化、英語に限らない教育課程全体で自分の意見を根拠に基づいて説明する活動の徹底 等)

※ U.S. Department of STATE, FOREIGN SERVICE INSTITUTEのHP (Foreign Language Training - United States Department of State)
なお、英語を母語とする子供は4歳(±17,520時間)までに基本的な文法知識を習得するとされている。
Brown, S., & Larson-Hall, J. (2012). Second language acquisition myths: Applying second language research to classroom teaching. University of Michigan Press ELT.
中田達也. (2023). 最新の第二言語習得研究に基づく「究極の英語学習法」. KADOKAWA.

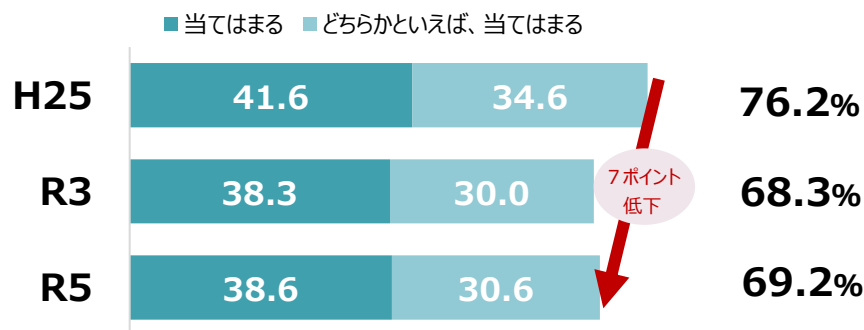


参考資料・データ

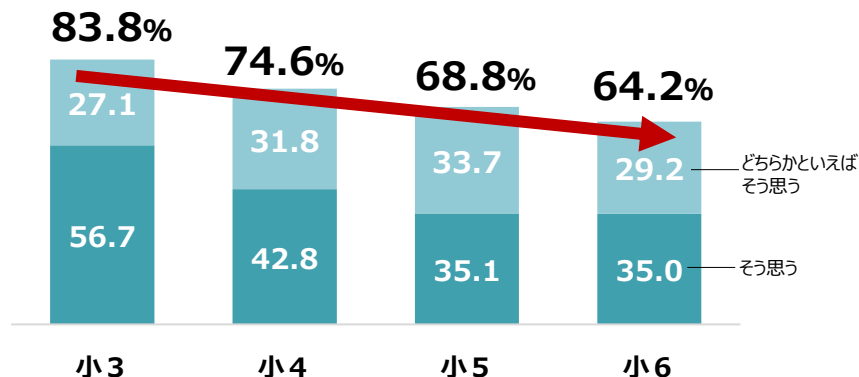
小学校

- 英語の学習が「好き」の割合は高いが、H25→R5で7ポイント低下（学年が上がるほど低い傾向）
- 英語を学ぶ意欲は小5にかけて低下するが小6で上昇（全学年で8割以上）
- 授業の理解度への肯定的回答は全学年で6割超（小6がもっとも高い）

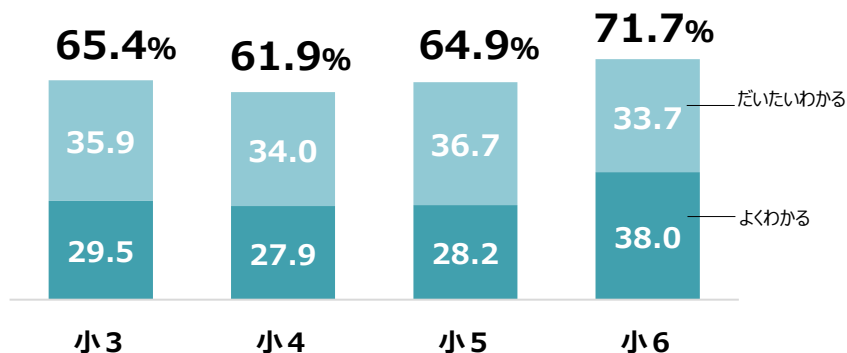
英語の学習（勉強）は好きですか（小6経年）



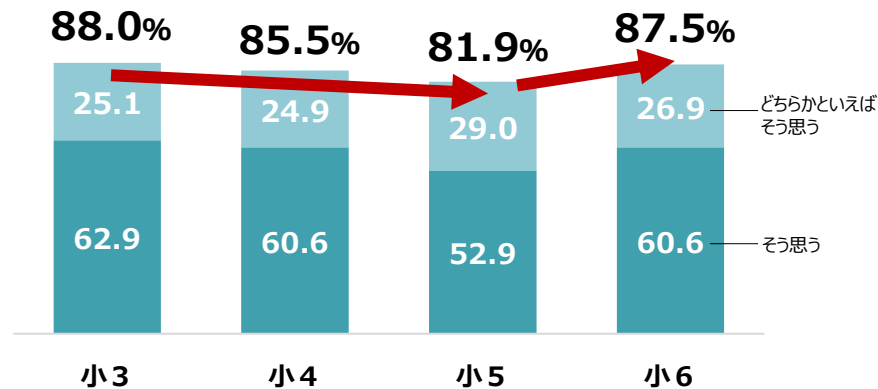
英語の学習が好きだ（学年別）



英語の授業がどの程度わかりますか



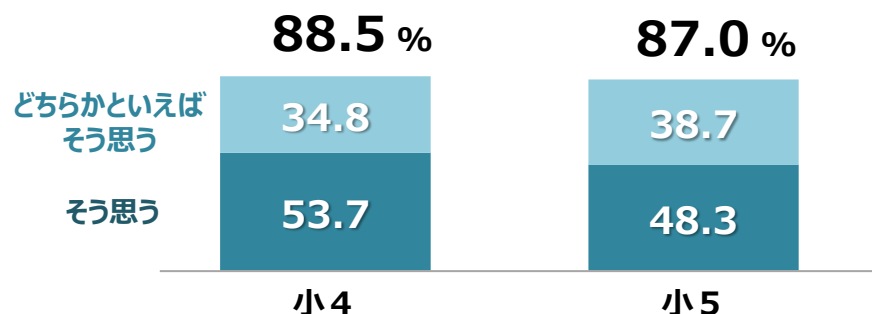
今後もっと、英語を聞いて相手の言いたいことがわかったり、
英語で自分の考えや気持ちなどを伝え合ったり、発表できるようになりたい



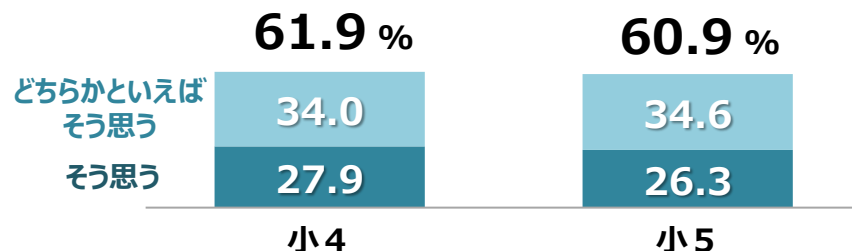
- 小3～5**
- 授業で、「先生や友達が英語で考えや気持ちなどを話すのを聞こうとしている」は9割弱
「自分のことについて考えや気持ちなどを英語で伝え合ったり発表し合ったりしている」は6割程度
 - 英語を学ぶ意欲に対する肯定的な回答は8割以上

英語の授業での意欲

- 英語の授業で、先生や友達が英語で考えや気持ちなどを話すのを聞こうとしている

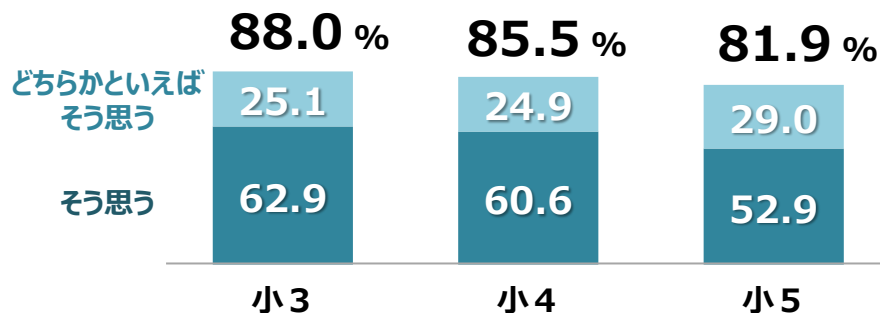


- 英語の授業で、自分のことについて考えや気持ちなどを英語で伝え合ったり発表したりしようとしている

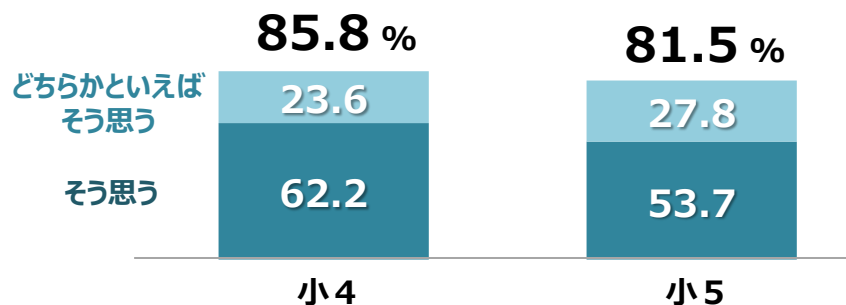


英語を学ぶ意欲

- 今後もっと、英語を聞いて相手の言いたいことがわかったり、英語で自分の考えや気持ちなどを伝え合ったり発表できるようにになりたい



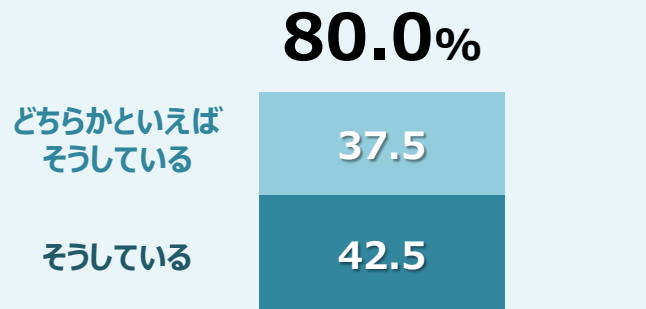
- 今後もっと、英語を読んだり、英語で自分の考えや気持ちなどを書いたりできるようになりたい



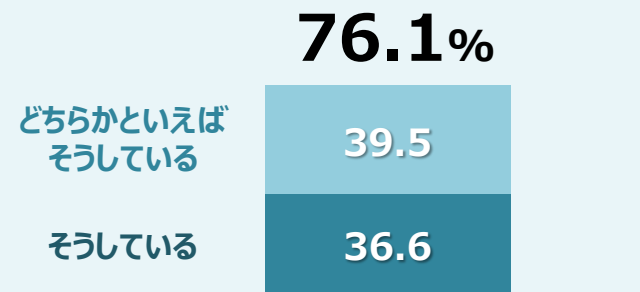
※グラフの数値は各選択肢を選んだ児童の割合 (%) (重み付き)

- 英語の授業での意欲を問う質問に対して、肯定的な回答をした児童は7～8割
- 英語学習がふだんの生活や社会に出て役立つと考える児童が9割

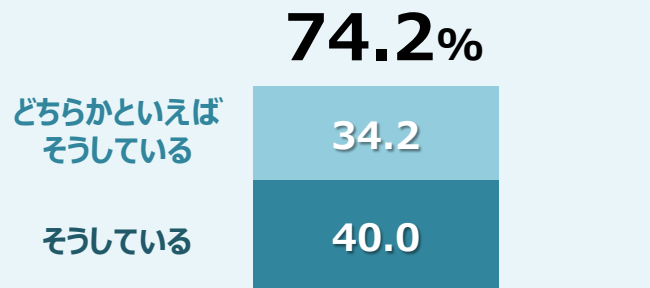
- 英語の授業で、ほかの人のよいところを取り入れて学習を進めている



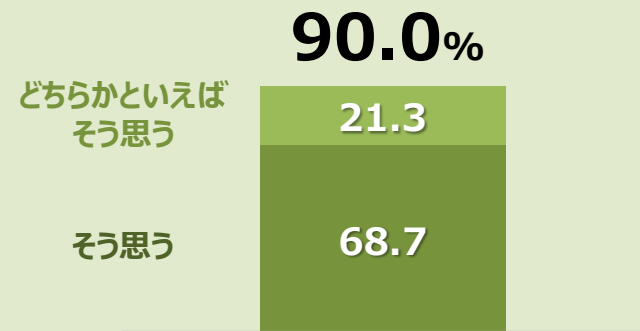
- 英語の授業で、もっとよくできるように繰り返し活動や練習に取り組もうとしている



- 英語の授業で、さまざまな国や地域の文化などに興味をもって知ろうとしている



- 英語の学習をすれば、ふだんの生活や社会に出て役立つ

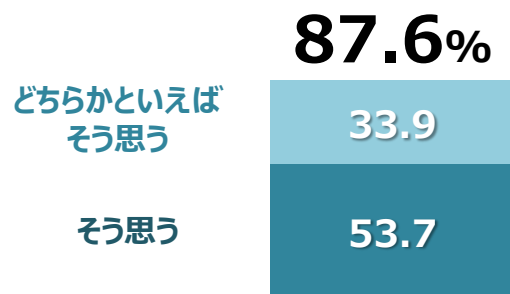


※グラフの数値は各選択肢を選んだ児童の割合 (%) (重み付き)

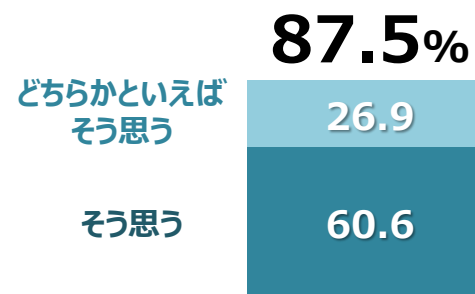
「聞く」「話す」「読む」「書く」のいずれも、今後必要だと考える児童が多く、もっとできるようになりたいという意欲も高い傾向にある

「聞く」「話す（伝え合ったり発表したりすること）」

- 英語を使って、考えや気持ちなどを聞いたり伝え合ったり発表したりすることは、今後必要だ

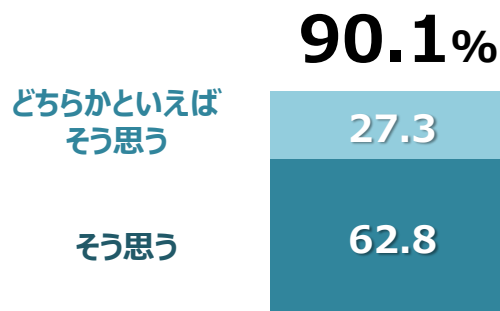


- 今後もっと、英語を聞いて相手の言いたいことがわかったり、英語で自分の考えや気持ちなどを伝え合ったり発表できるようになりたい

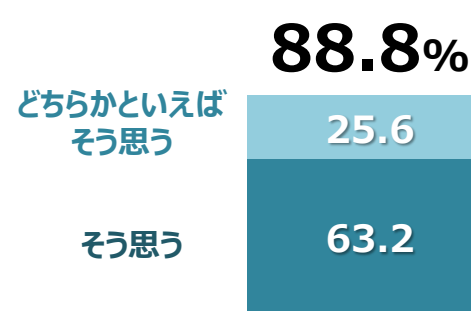


「読む」「書く」

- 英語を読んだり、英語で自分の考えや気持ちなどを書いたりすることは、今後必要だ



- 今後もっと、英語を読んだり、英語で自分の考えや気持ちなどを書いたりできるようになりたい

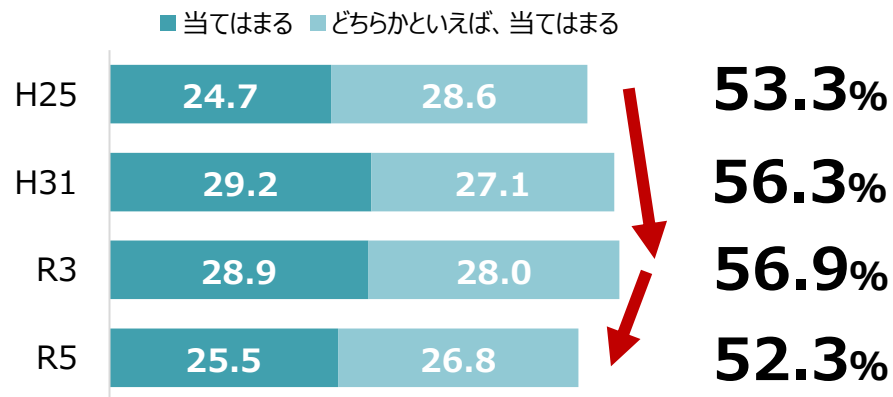


※グラフの数値は各選択肢を選んだ児童の割合 (%) (重み付き)

(出典) 令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査 児童質問紙調査

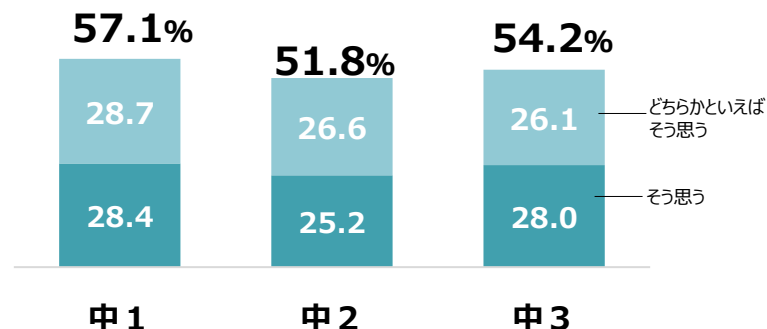
- 英語の学習が「好き」はH25→R3で若干上昇、R3→R5で若干低下
- 授業の理解度はH31→R5で大きな変化はない

英語の学習（勉強）は好きですか（中3経年）



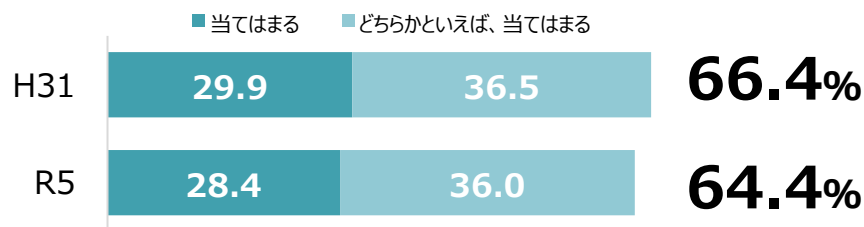
英語の学習が好きだ（学年別）

暫定値



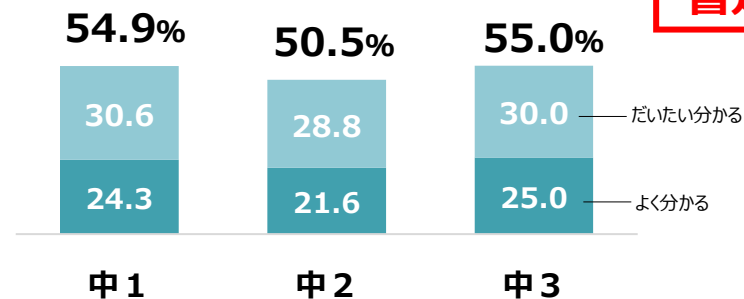
※各回答の数値は、小数第1位までの概数で表示。
肯定的な回答を求める際は、小数第2位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。
（出典）令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査 生徒質問調査

英語の授業の内容はよく分かりますか（中3経年）



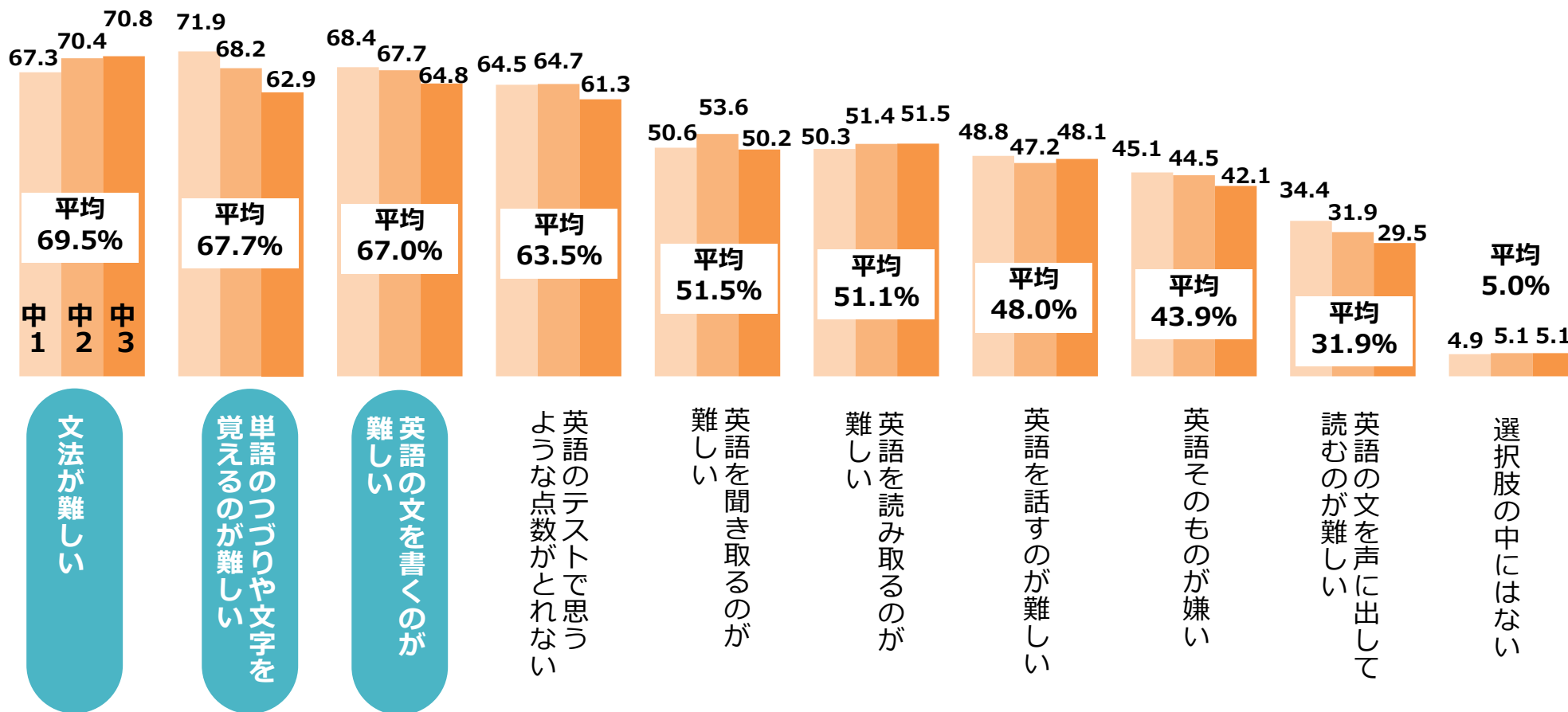
英語の授業がどの程度わかりますか（学年別）

暫定値



※各回答の数値は、小数第1位までの概数で表示。
肯定的な回答を求める際は、小数第2位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。
（出典）令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査 生徒質問調査

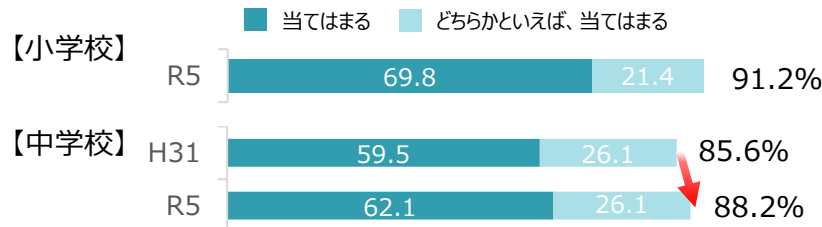
「英語の学習が好きだ」に否定的な回答の理由



英語学習は大切・役に立つと考える児童生徒は多く増加傾向だが、将来的な活用意欲や日常生活での活用機会は比較的低く中学校では減少傾向

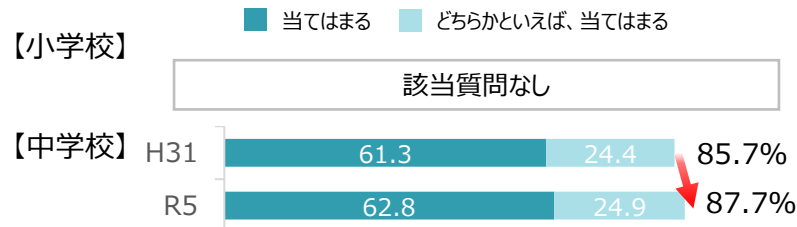
英語学習の重要度に関する意識

- 英語の勉強は大切だと思いますか



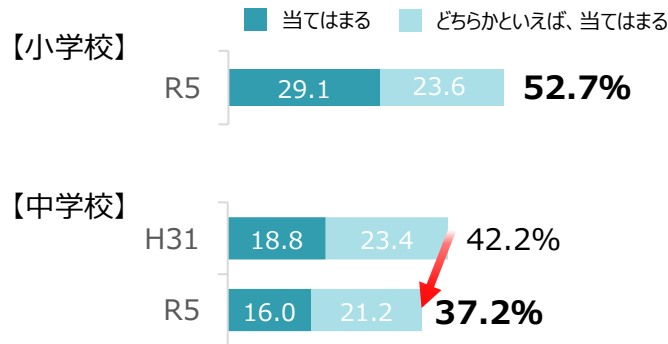
※小学校については、R5にて新出の質問のため、過去との比較はなし。

- 英語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか



将来的な英語活用に対する意識

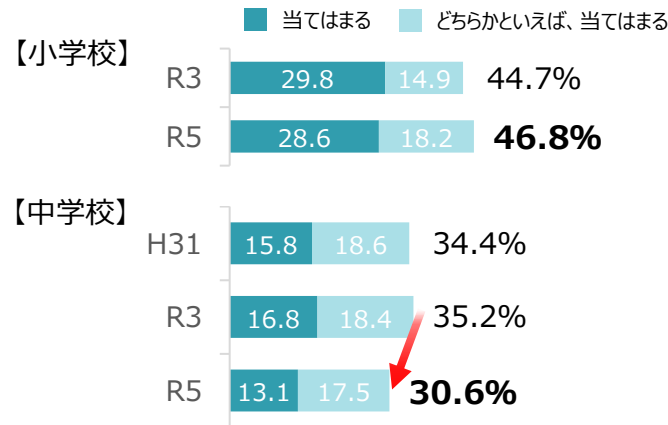
- 将来、積極的に英語を使うような生活をしたり職業に就いたりしたいと思いますか



※小学校については、R5にて新出の質問のため、過去との比較はなし。

日常生活での英語活用機会

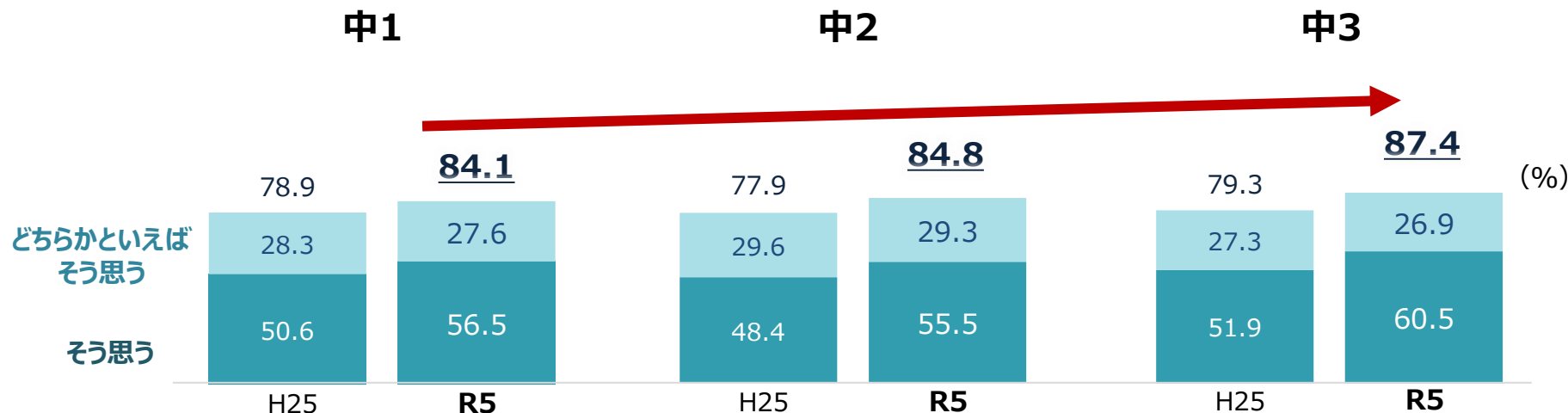
- これまで、学校の授業やそのための学習以外で、日常的に英語を使う機会が十分にありましたか（地域の人や外国にいる人と英語で話す、英語で手紙や電子メールを書く、英語のテレビやホームページを見る、オンラインで他者と英語で交流する、英会話教室に通うなど）



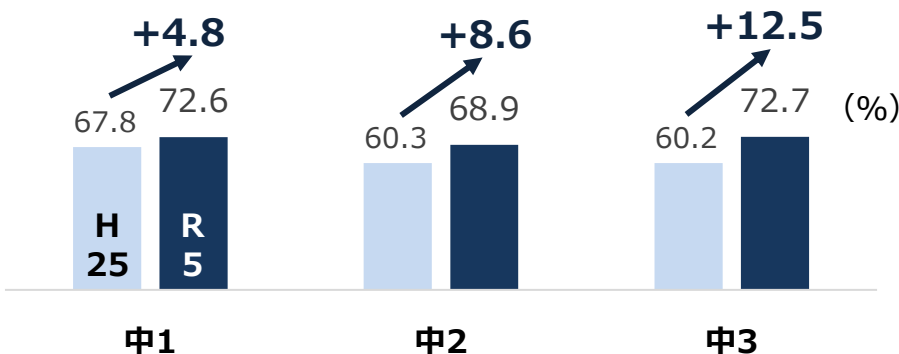
※小学校では、次の質問文となっている。「これまで、学校の授業以外で、英語を使う機会がありましたか（地域の人や外国にいる人と英語で話す、英語で手紙や電子メールを書く、英語のテレビやホームページを見る、PC・タブレットなどのICT機器を利用して他者と英語で交流する、英会話教室に通うなど）」

- 英語を学ぶ意欲はH25→R5で上昇（全学年で8割以上、学年が上がるほど高い傾向）
- 「英語で自分の考えや気持ちを伝えることができるよう、英語を勉強している」、「授業では積極的に英語を使うようにしている」に肯定的な回答は、全学年で上昇

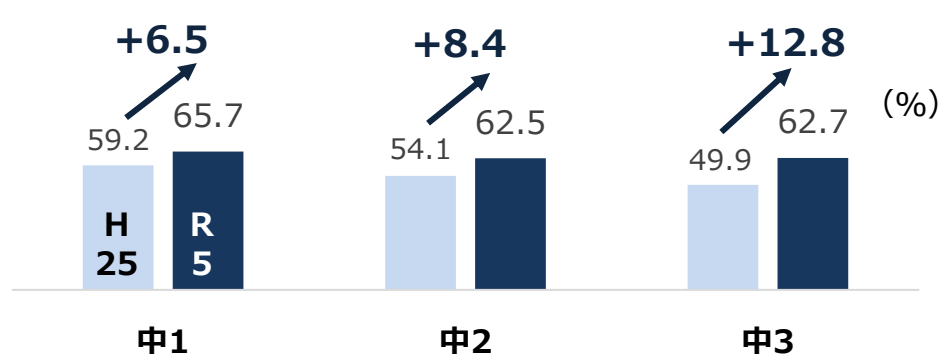
英語の学習をすれば、ふだんの生活や社会に出て役立つ



英語で自分の考えや気持ちを伝えることができるよう、英語を勉強している



授業では積極的に英語を使うようにしている

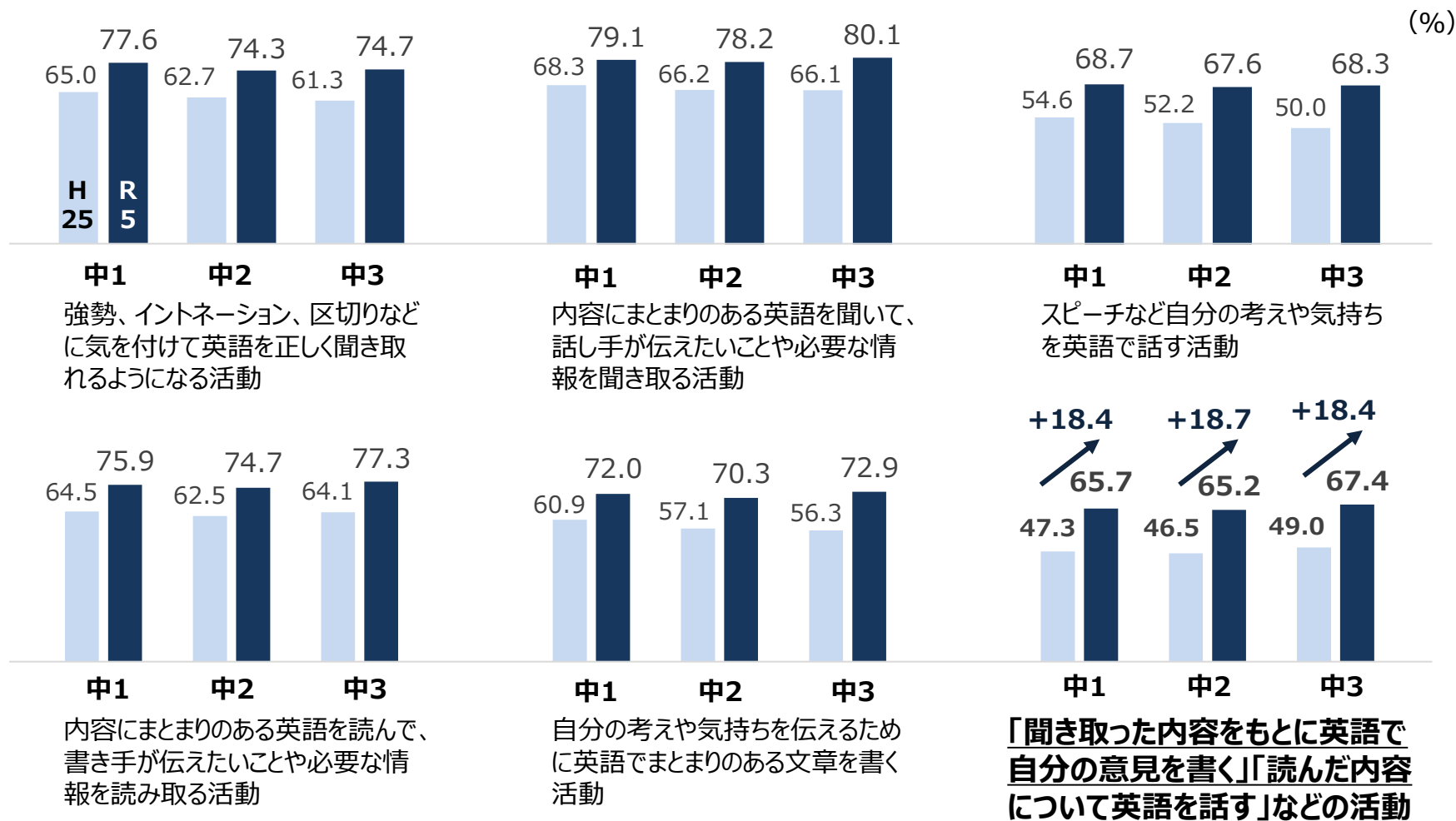


※「英語で自分の考えや気持ちを伝えることができるよう、英語を勉強している」、「授業では積極的に英語を使うようにしている」は、「そうしている」と「どちらかといえばそうしている」の割合を合計して算出。
 ※各回答の数値は、小数第1位までの概数で表示。肯定的な回答を求める際は、小数第2位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。

(出典) 令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査 生徒質問調査

- 言語活動に対する意欲はH25→R5で向上（全学年において、10ポイント以上上昇）
- 特に、「聞き取った内容をもとに英語で自分の意見を書く」「読んだ内容について英語を話す」などの活動は、前回調査を18ポイント以上上回る

言語活動に対する意欲に関する質問



※肯定的な回答の割合は、「そうしている」と「どちらかといえばそうしている」の割合を合計して算出。

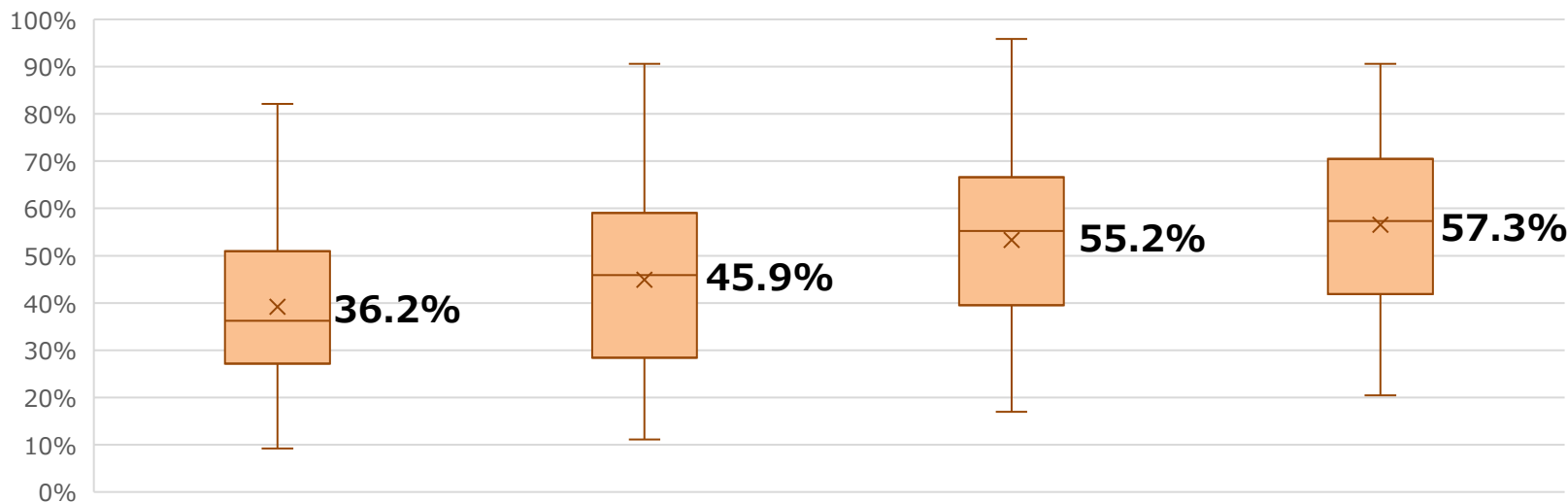
※各回答の数値は、小数第1位までの概数で表示。肯定的な回答を求める際は、小数第2位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。

(出典) 令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査 生徒質問調査



- 「どの程度まで英語を身に付けたいと思っていますか」の質問に対して、(1)「高校入試に対応できる力を付けたい」や(2)「海外旅行などをするとときに、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい」と回答する生徒のほうが通過率の平均が高い傾向。
- 2項目の比較では、(2)「海外旅行などをするとときに、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい」を目的としている生徒の方が通過率の平均が高い傾向。

回答別、通過率の平均の分布



(1)「高校入試に対応できる力を付けたい」

当てはまらない

当てはまる

当てはまらない

当てはまる

(2)「海外旅行などをするとときに、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい」

当てはまらない

当てはまらない

当てはまる

当てはまる

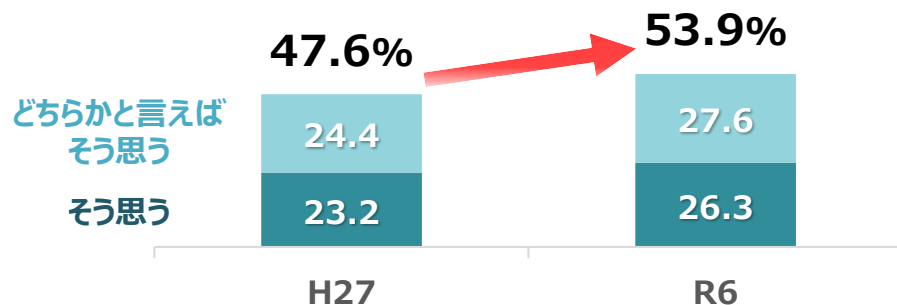
※「当てはまらない」は、「『当てはまる』と選択していない」、「当てはまる」は、「『当てはまる』と選択した」ことを指す。

※括弧内の数字は質問調査の選択肢番号とは異なる

(出典) 令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査

英語学習に対する意識

- 英語の学習が好きだ

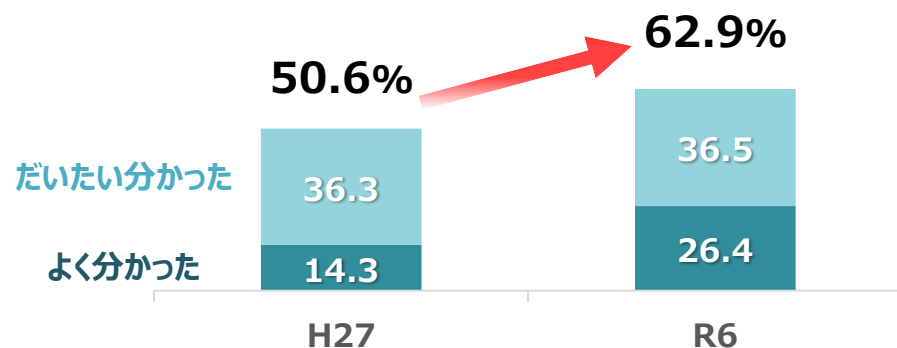


「英語の学習が好きだ」という質問に対する
肯定的な回答は、
前回調査から**6.3ポイント上昇**

授業の理解度

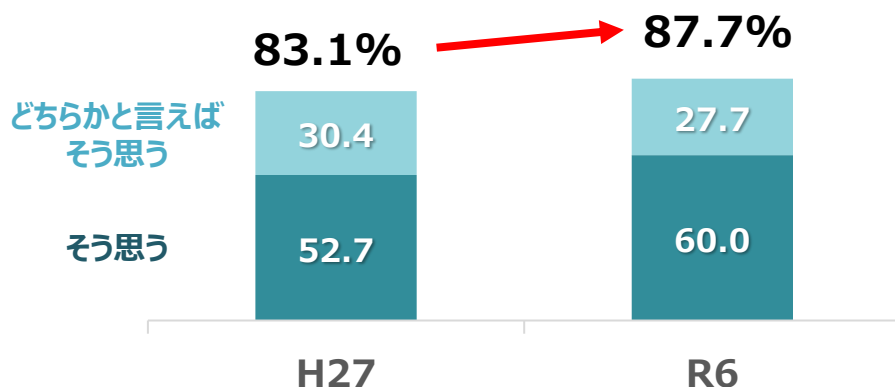
- 「英語コミュニケーションⅠ」の授業がどの程度分かりましたか

※H27は「コミュニケーション英語Ⅰ」



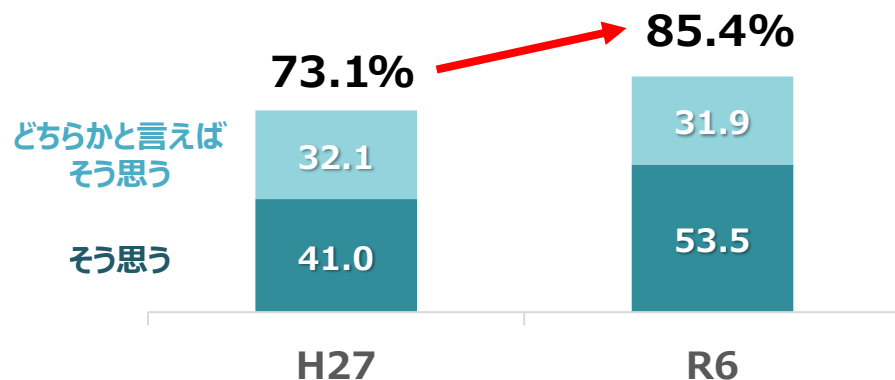
「『英語コミュニケーションⅠ』の授業がどの
程度分かりましたか」という質問に対する
肯定的な回答は、
前回調査から**12.3ポイント上昇**

英語の学習は大切だ



「英語の学習は大切だ」という質問に対する肯定的な回答は、
前回調査から**4.6ポイント上回る**

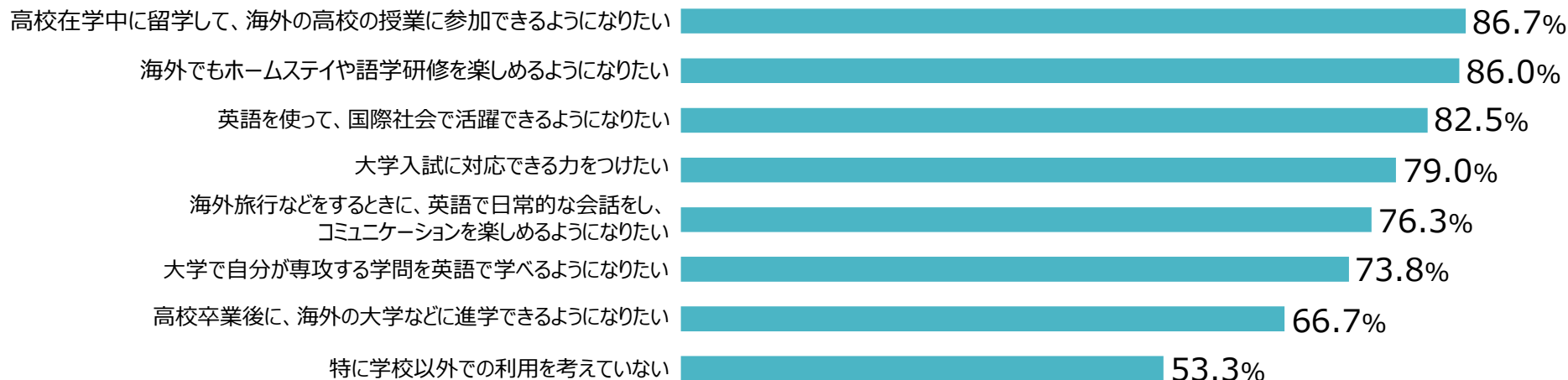
英語を学習すれば、ふだんの生活や社会に出て役立つ



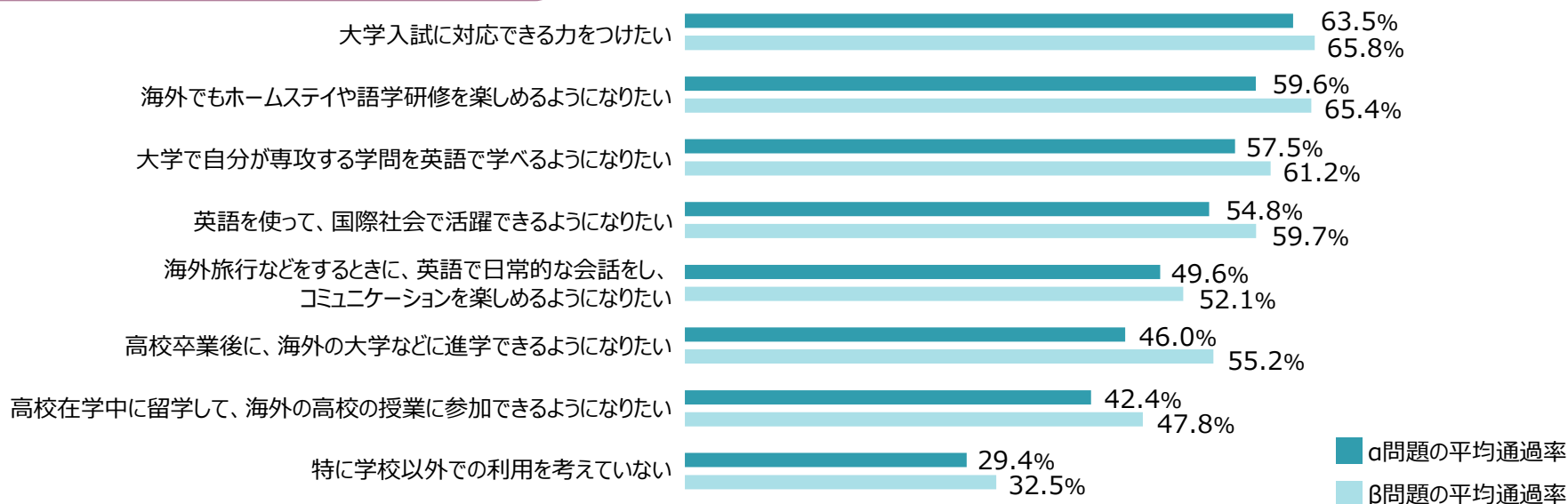
「英語を学習すれば、ふだんの生活や社会に出て役立つ」という質問に対する肯定的な回答は、
前回調査から**12.3ポイント上回る**

どの程度まで英語を身につけたいと思っていますか

回答別平均通過率（実技調査問題）



回答別平均通過率（ペーパーテスト調査問題）



※実技調査問題の回答数は204人、ペーパーテスト調査問題の回答数は8,703人。最も当てはまる選択肢の一つを選ぶ形式。

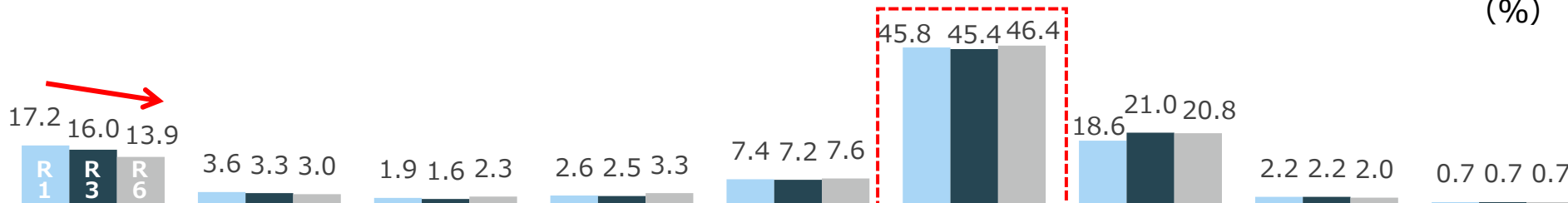
（出典）令和6年度高等学校学習指導要領実施状況調査 生徒質問調査

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。

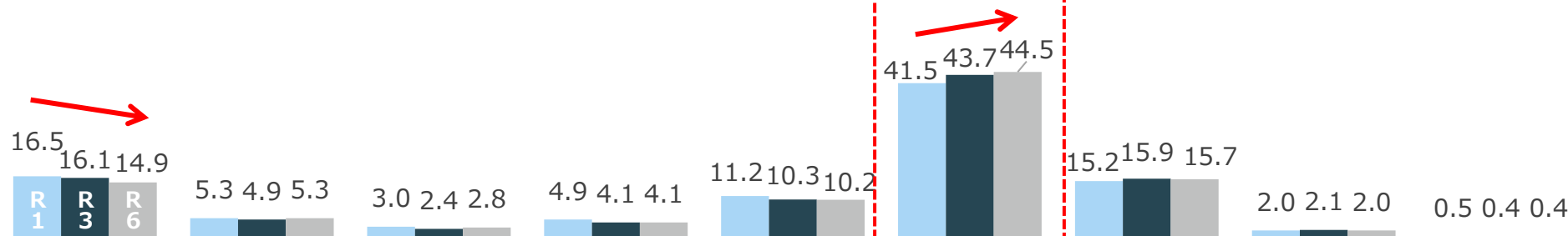
Q 現在、英語をどの程度まで身につけたいと思っていますか

(%)

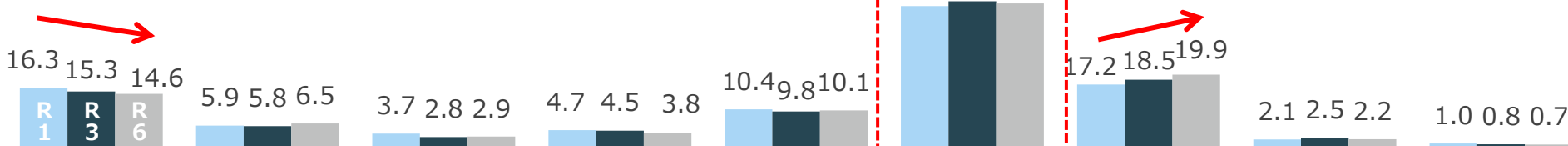
高1



高2



高3



国際社会で活躍できるくらい

大学での専門教育を英語で学べるくらい

海外進学をめざせるくらい

海外の高校の授業に参加できるくらい

ホームステイや語学研修を楽しめるくらい

英語で日常的な会話を楽しめるくらい

特に利用を考えない

その他

未記入・誤記入

※最も近いものを次のうちから1つ選ぶ形式。

(出典) 令和7年度英語教育に関する調査研究 (英語力に関する調査分析)

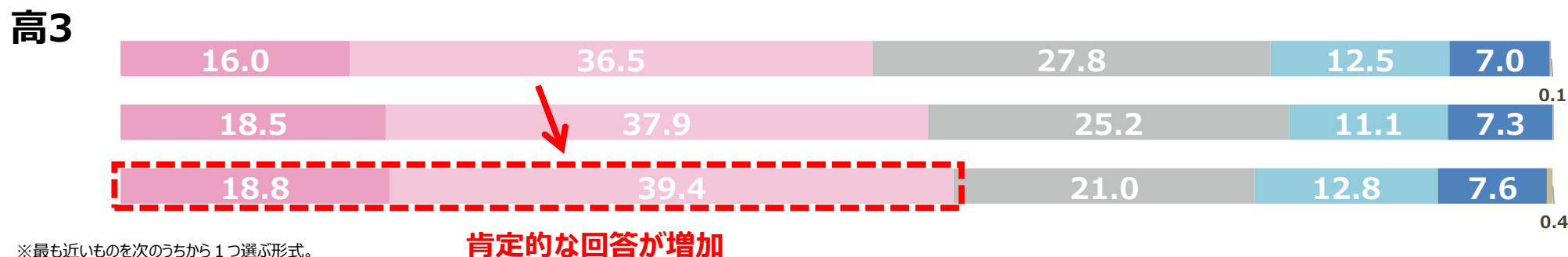
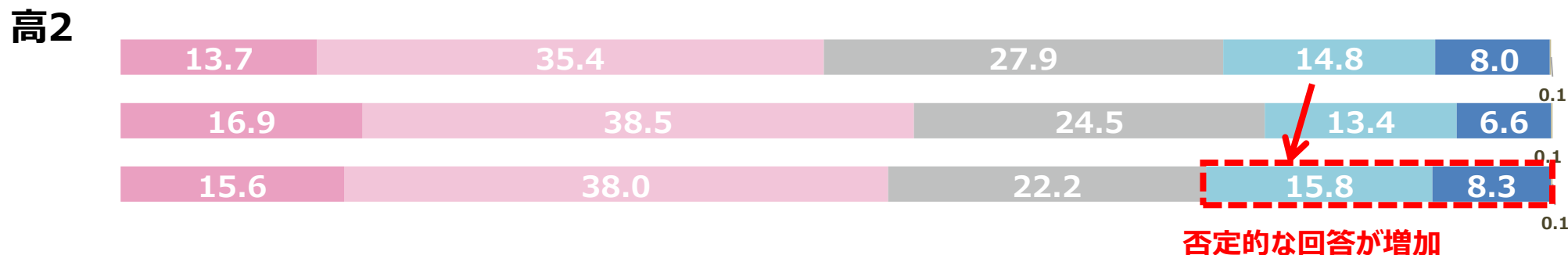
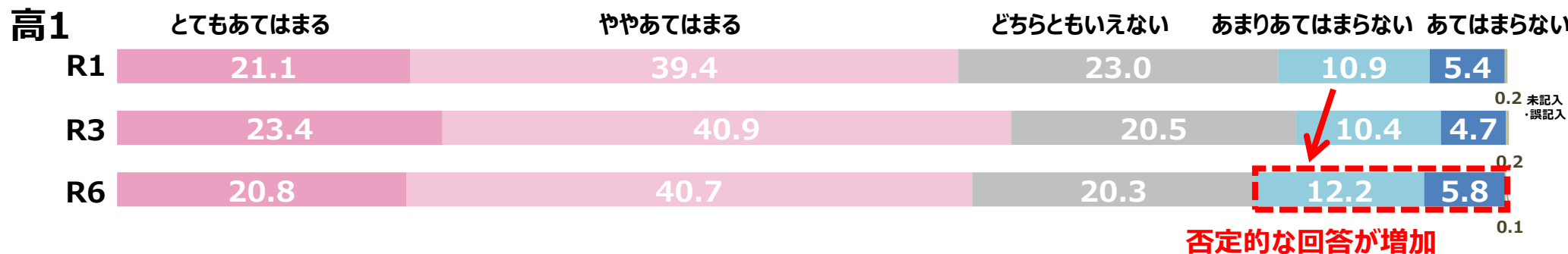
どの学年も割合が高い

- 高1・2では「目標や目的をもって授業に取り組むようにしている」に否定的な回答はR1→R6で増加
- 一方、高3では肯定的な回答が増加

Q 目標や目的をもって授業に取り組むようにしている

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。

(%)

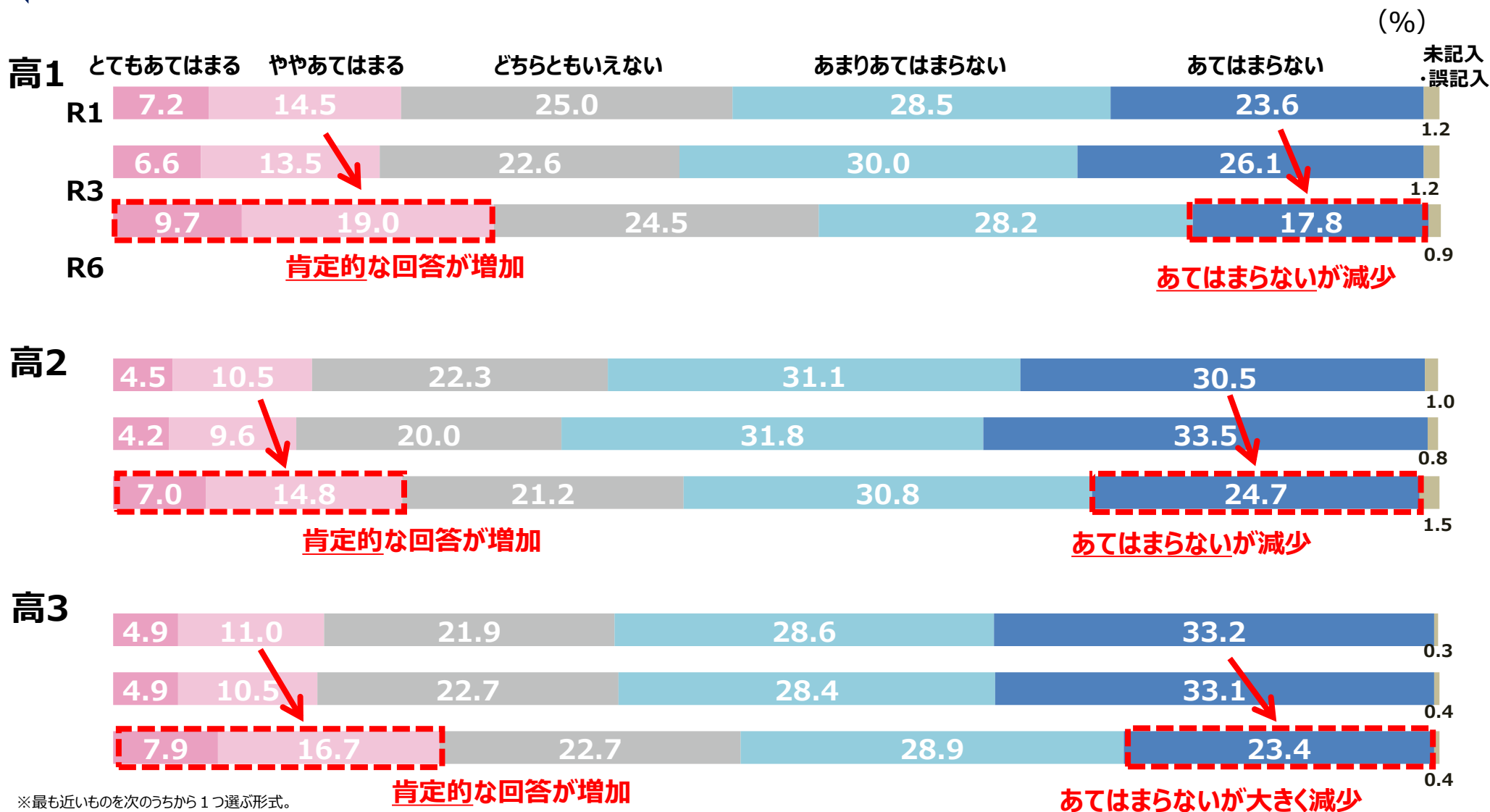


※最も近いものを次のうちから1つ選ぶ形式。

(出典) 令和7年度英語教育に関する調査研究（英語力に関する調査分析）

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。

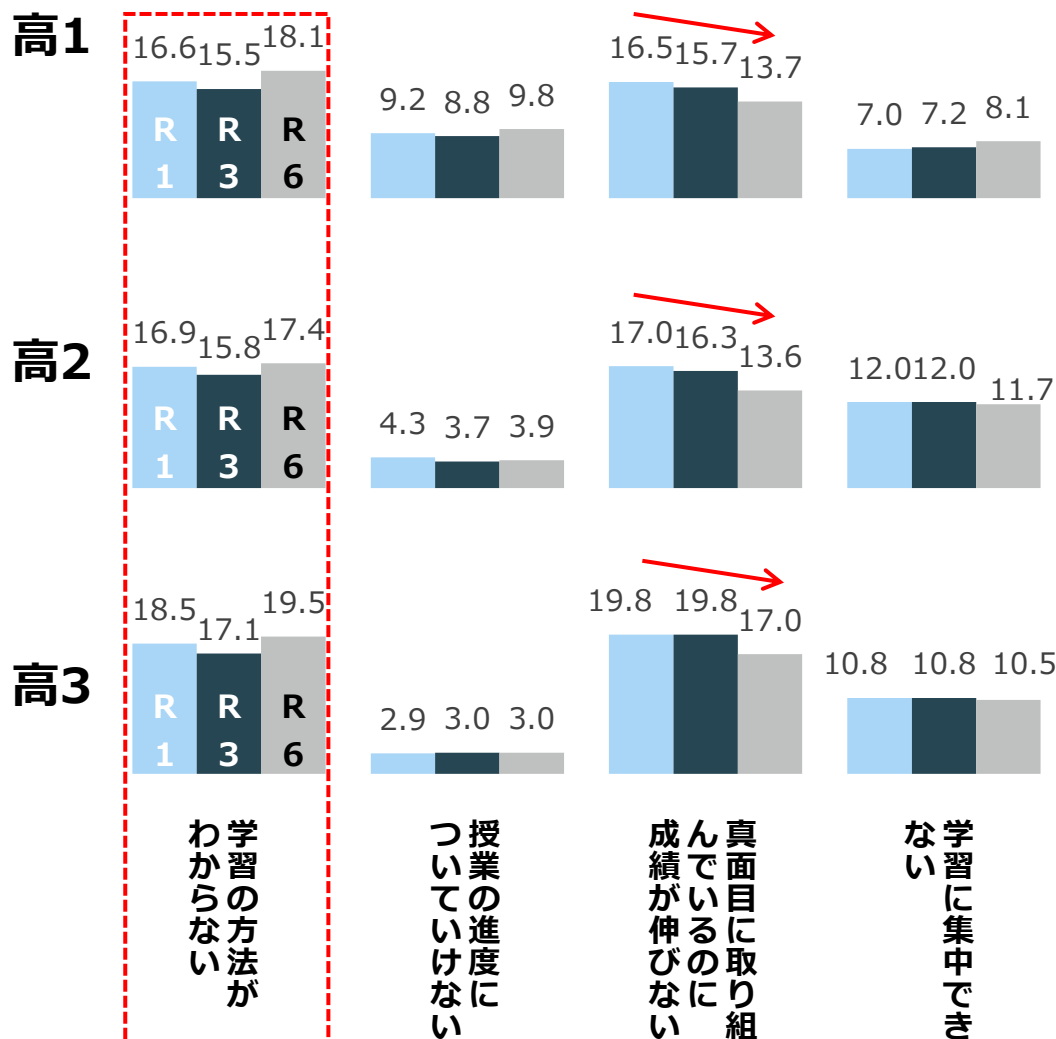
Q ネイティブの先生に英語で話しかけるなど、積極的に英語を話すようにしている



- 高2・3では「計画を実行できない、または長続きしない」に悩んでいる割合が最多
- どの学年も「学習の方法がわからない」割合が一定存在

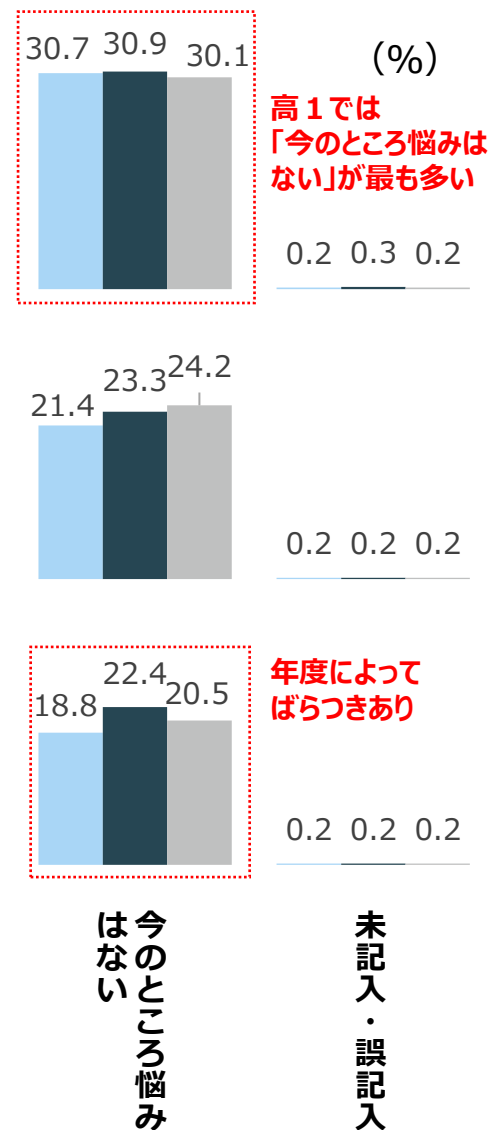
Q 英語について、学習するうえで、悩んでいることは何ですか

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。



どの学年も一定割合存在

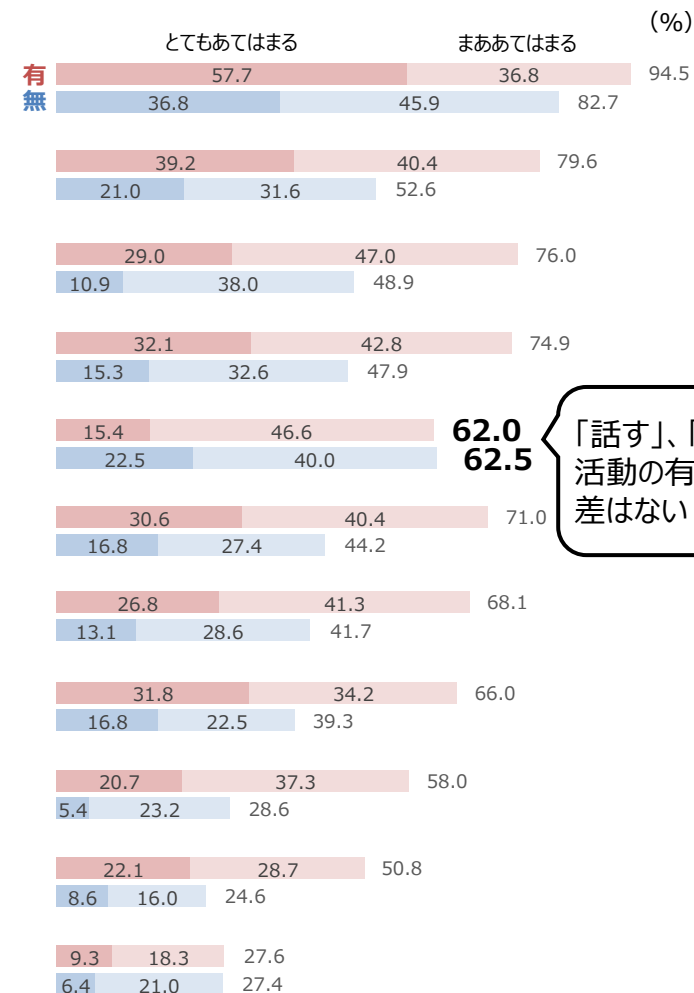
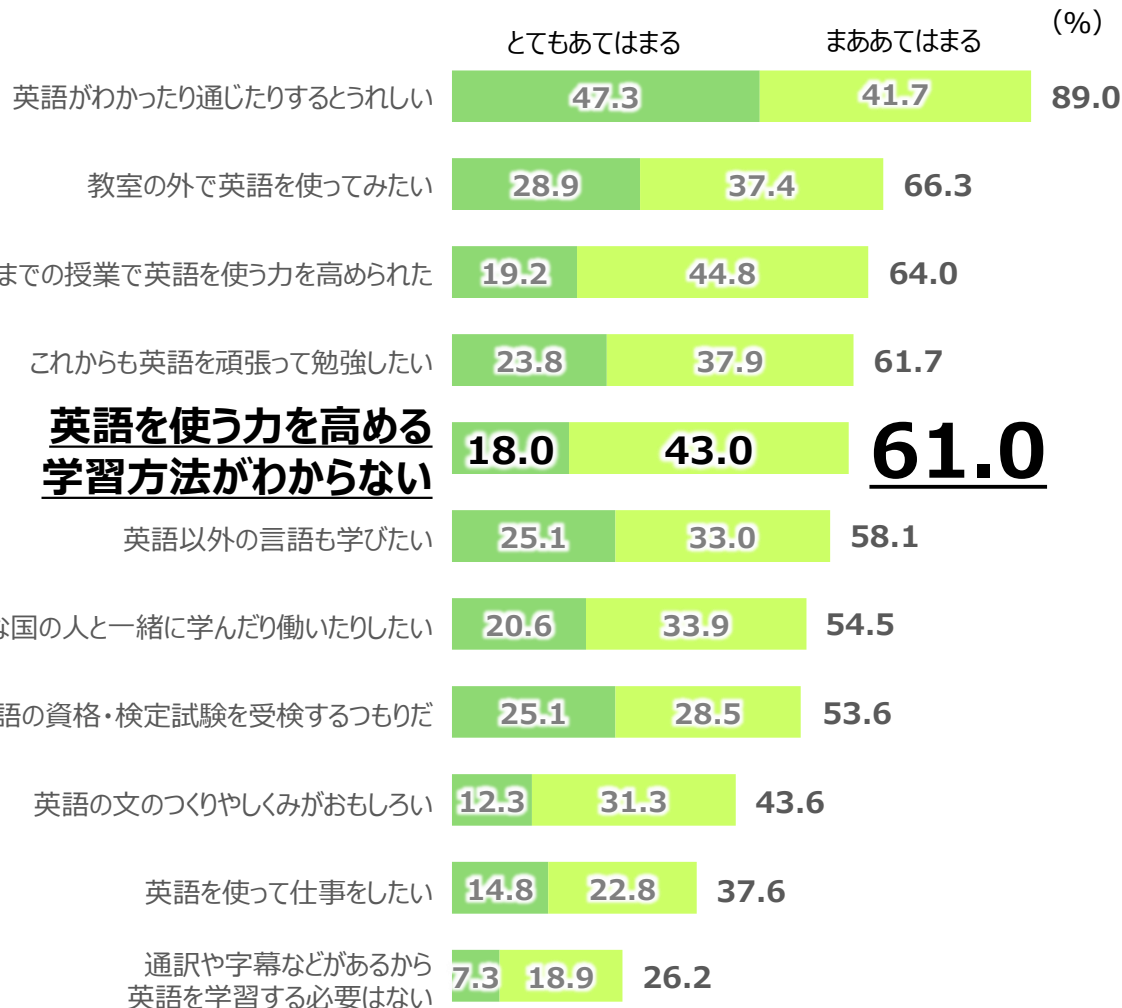
どの学年も一定割合存在
高2・3では最も多い



英語を使う力を高める学習方法がわからない高3生が6割

英語や英語学習に関することについて教えてください

※ 参考 「話す」+「書く」活動の有無別



「話す」、「書く」
活動の有無で
差はない

※高3生に対して2021年3～4月に実施。

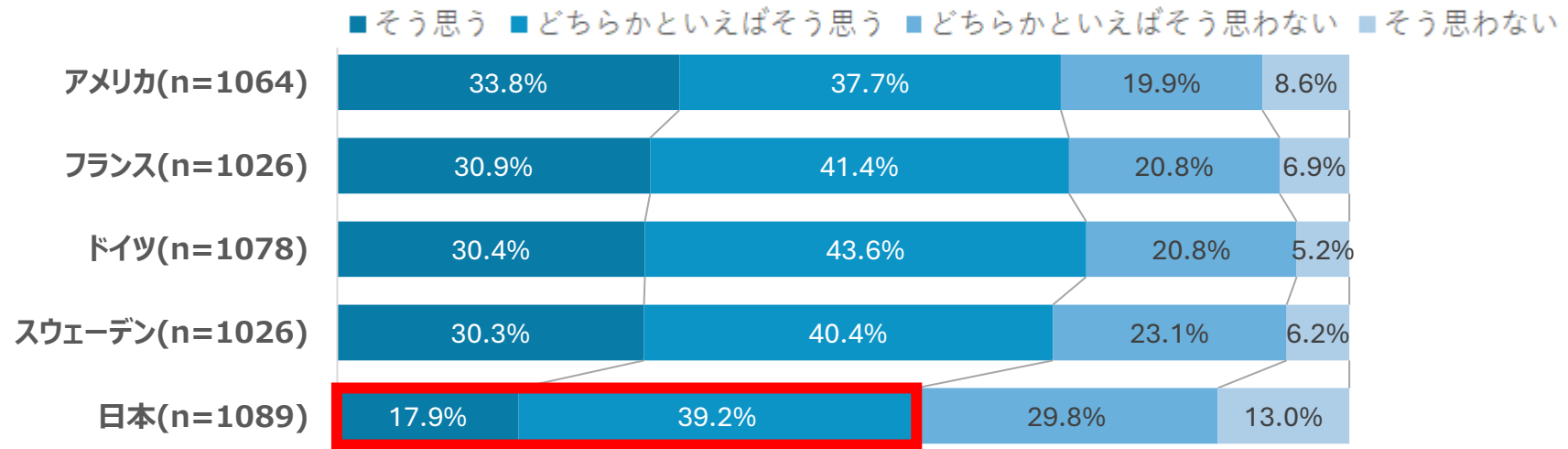
※「英語がわかったり通じたりするとうれしい」「教室の外で英語を使ってみたい」の項目は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。それ以外の項目は、「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

※授業で「話す」「書く」活動についてどちらか「していた（よく+ときどき）」と回答した群（421名）を「話す」+「書く」活動をしていた群、どちらも「していなかった（あまり+まったく）」と回答した（405名）群を「話す」+「書く」活動をしていなかった群としている。

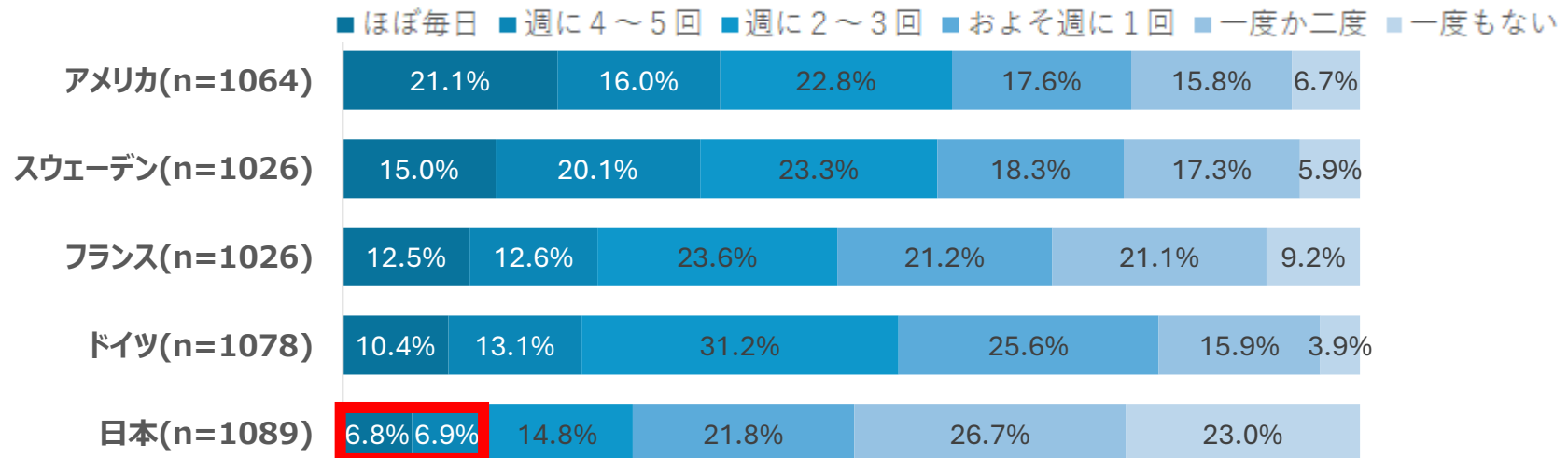
（出典）ベネッセ教育総合研究所「高3生の英語学習に関する調査（2015-2021継続調査）」

日本の若者は発信力に課題

自分の考えをはっきり相手に伝えることができる

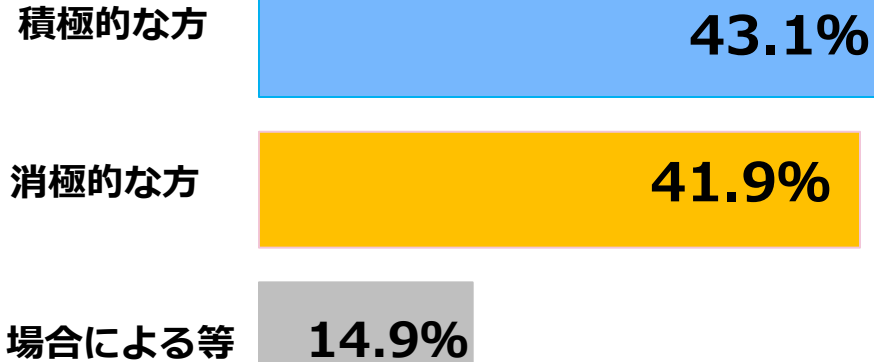


自信をもって自分のアイデアや意見を考えたり、話したりした

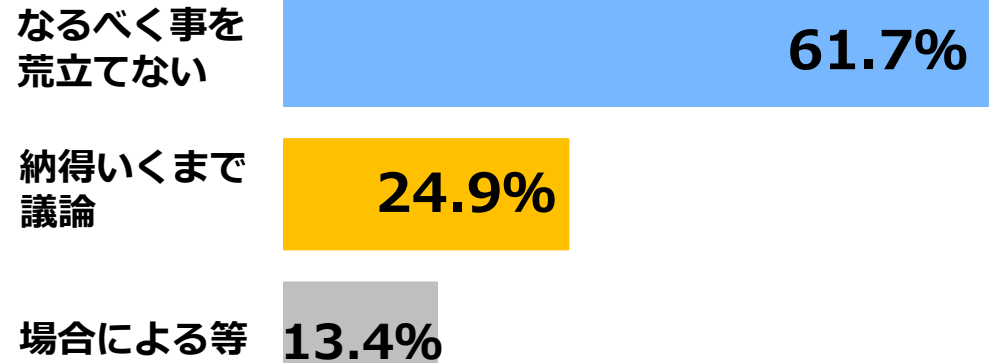


意見を主張することに消極的

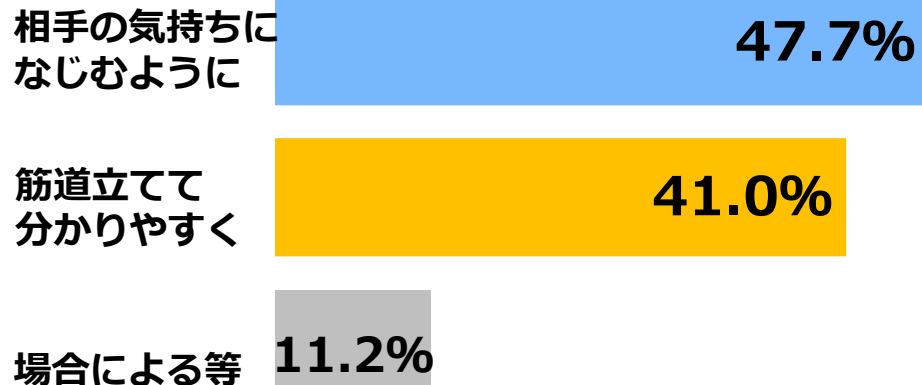
自分の考えや意見を表現すること



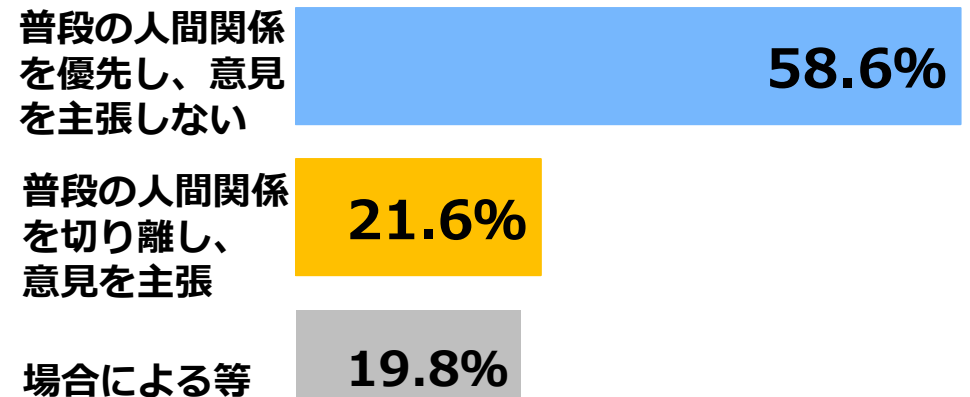
人と意見が食い違ったとき



人に話をするとき



友人や同僚などと意見交換するとき



「自分の考え」を書くことが苦手

全国学力・学習状況調査では、自分の考えをまとめたり書いたりする問題の正答率に課題が見られる

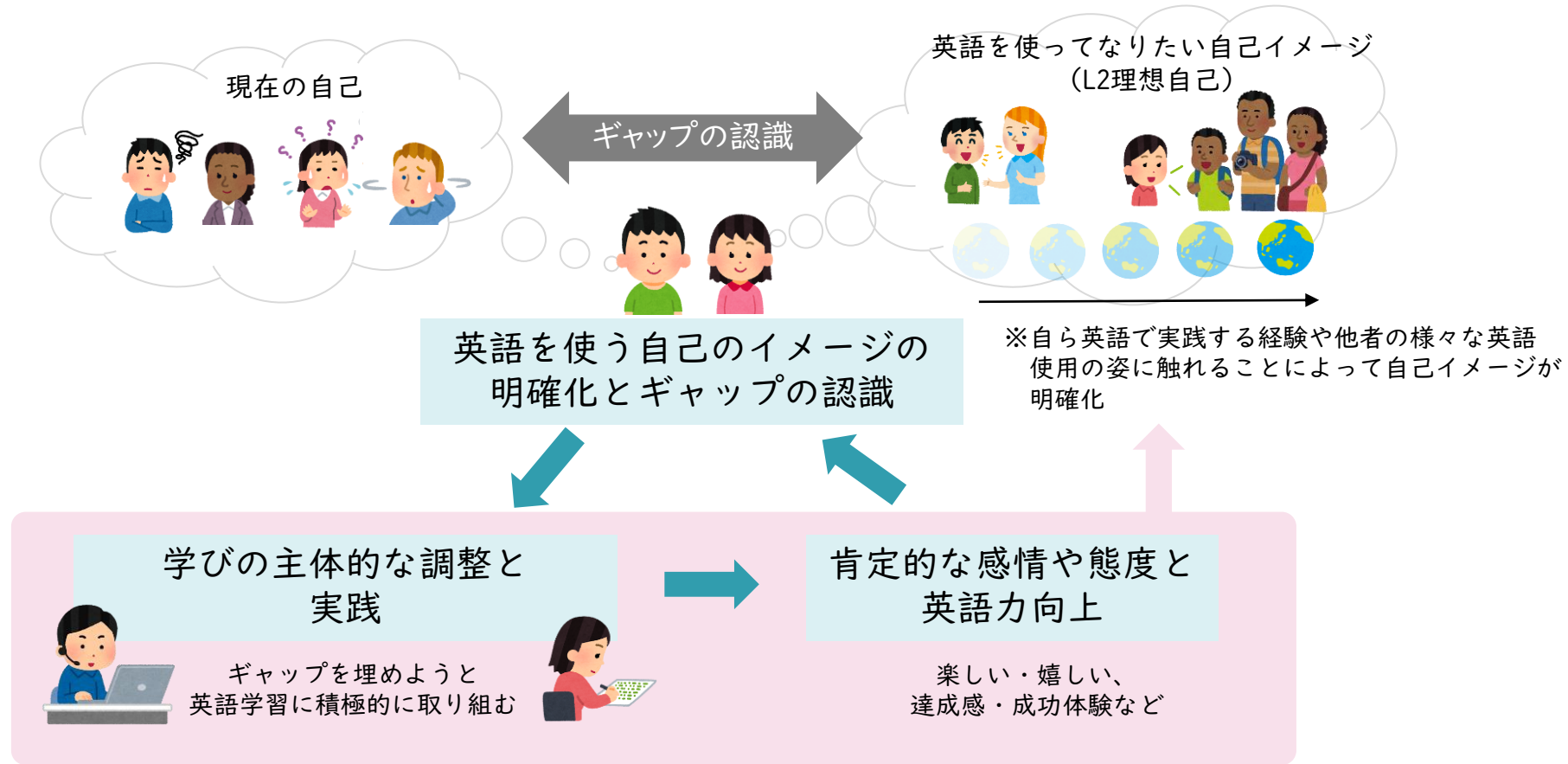
小6・国語

問題の概要	出題の趣旨	正答率	無解答率
「ごみ拾い」か「花植え」かのどちらかを選んで、 でどのように話すかを書く（R4）	互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、 自分の考え をまとめる	47.8%	3.0%
【川村さんの文章】の空欄に学校の米作りの問題点と解決方法を書く（R5）	図表やグラフなどを用いて、 自分の考え が伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる	26.8%	7.0%
資料を読み、運動と食事の両方について分かったことをもとに、自分ができそうなことをまとめて書く（R5）	文章を読んで理解したことに基づいて、 自分の考え をまとめることができるかどうかをみる	56.4%	8.4%

中3・国語

問題の概要	出題の趣旨	正答率	無解答率
参加者の誰がどのようなことについて発言するとよいかと、そのように 考えた理由 を書く（R3）	話合いの話題や方向を捉えて、 話す内容を考える	57.5%	3.3%
農林水産省のウェブページにある資料の一部から必要な情報を引用し、意見文の下書きにスマート農業の効果を書き加える（R4）	自分の考え が伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く	46.5%	8.8%

(参考) 英語を使う自己のイメージの明確化と学びの自己調整の循環プロセスのイメージ



<参考>

- Dörnyei (2005) は、L2 (第二言語) の学習に関し、「L2理想自己」「L2義務自己」「L2学習経験」の3つの要素から構成される「L2動機づけ自己システム (L2 motivational self-system)」を提唱。これらの3つの要素が言語学習の動機づけに大きな影響を与えることが多くの研究において示されている。
- このうち「L2理想自己 (Ideal L2 Self)」について、大和 (2018) は以下の通り整理。
 - L2理想自己は、L2を学習する際に、「こうなりたい」と願う理想的な自己の姿である。英語を学ぶ多くの学習者は英語を自由に話すことができたと願っている。
 - もし、この願望が真に自らの理想とするならば、理想の自己と現在の自己との間のギャップを埋めようと英語学習に積極的に取り組むことになる。
 - 自ら主体的に将来の自己の理想とする姿を現実感を伴う具体的な形で意識できた時、学習者は初めてその「理想自己」に向かって主体的に学習活動を計画し調整することが可能になると考えられる。
- 高木他 (2023) は中高生 (中1・中3・高1・高3) を対象に、将来の英語使用者としての自己像の認識に関する自由記述項目を分析。中高生の発達段階において、L2理想自己は変化し、変化の軌跡も多様であるが、全ての学年で「海外旅行」「(外国)人とのコミュニケーション」「仕事」における英語使用の自己像が共通して現れた。

(出典) 以下の文献を参考に、文部科学省作成。

Dörnyei, Z. (2005). The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition. Erlbaum.

大和隆介.(2018).動機づけ：英語学習の多様性に影響を与える情意要因. 酒井英樹・廣森友人・吉田達弘編著,「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法,大修館書店。

高木亜希子・津久井貴之・加藤由美子・森下みゆき・福本優美子.(2023).中高生の将来の英語使用者としての自己像の認識—6年間の経年調査からの考察—,言語教師教育Vol.10, No.1。

森田光宏・亘理陽一・水本篤.(2025).「好き」の向こう側—英語学習者の縦断的調査—,外国語教育メディア学会機関誌, 62巻。

(参考) 現行の学習指導要領解説 柱書

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらをつなげた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

小・外国語活動

小・外国語

中学校

高等学校

- ・「外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して」とは、外国語活動の目標を実現するために必要な指導事項について述べたものであり…（小～中の外国語においても同旨の記載）
- ・「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」が中学年の外国語活動の目標の中心となる部分である。これは、高学年の外国語科の目標である、「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」及び中学校の外国語科の目標である、「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」につながるものである。「素地」としたのは、中学校の外国語科が「コミュニケーションを図る資質・能力」であることに対して、高学年の外国語科の目標がその「基礎となる資質能力」であり、それに対しての「素地となる資質・能力」ということからである。総則にもあるとおり、小学校までの学習の成果が中学校教育に円滑に接続され、育成を目指す資質・能力を児童が確実に身に付けることができるよう工夫する必要がある。（小の外国語においても同様の記載）
- ・「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」が高学年の外国語科の目標の中心となる部分である。これは、中学年の外国語活動の目標である、「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」及び中学校の外国語科の目標である、「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を踏まえて設定されたものである。
- ・「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」が外国語科の目標の中心となる部分である。外国語の音声や文字を使って実際にコミュニケーションを図る資質・能力であり、理解する・表現する・伝え合うという三つの要素に整理した。「理解する」、「表現する」という単に受け手となったり送り手となったりする単方向のコミュニケーションだけでなく、「伝え合う」という双方向のコミュニケーションも重視している。（高の外国語においても同様の記載）
- ・中学校の外国語科の目標である「コミュニケーションを図る資質・能力」の育成は、小学校の外国語科において「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」の育成を目標としていることを踏まえて設定されたものであり、総則にもあるように、小学校までの学習の成果が中学校教育に円滑に接続され、育成を目指す資質・能力を生徒が確実に身に付けることができるよう工夫する必要がある。
- ・「外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらをつなげた統合的な言語活動を通して」とは、教科の目標を実現するために必要な指導事項について述べたものであり（略）統合的な言語活動とは、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと【やり取り】」、「話すこと【発表】」、「書くこと」の複数の領域を結び付けて統合した言語活動のことであり、中学校の外国語科においても、複数の領域を関連付ける統合的な言語活動を視野に入れた目標が設定されているが、高等学校では、こうした統合的な言語活動を一層重視した目標設定がなされている。
- ・「情報や考えなどを的確に理解したり、適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」は、外国語科の目標の中心となる部分である。外国語の音声や文字を使って実際にコミュニケーションを図る資質・能力であり、理解する・表現する・伝え合うという三つの要素に整理した。「理解する」、「表現する」という単に受け手となったり送り手となったりする単方向のコミュニケーションだけでなく、「伝え合う」という双方向のコミュニケーションも重視している。

(参考) 現行の学習指導要領解説 知識及び技能

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付く、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。	外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。

- 小・外国語活動
- 「言語や文化について体験的に理解を深め」とは、外国語活動において、児童のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、日本語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めることを指している。その際、知識のみによって理解を深めるのではなく、体験を通して理解を深めることとしている。体験的に理解を深めることで、言葉の大切さや豊かさ等に気付いたり、言語に対する興味・関心を高めたり、これらを尊重する態度を身に付けたりすることは、国語科の学習にも資するものと考えられる。
 - 「日本語と外国語との音声の違い等に気付く」とは、日本語と外国語を比較することで、日本語と外国語との音声の違い等に気付かせることを指している。日本語の音声の特徴を意識させながら、外国語を用いたコミュニケーションを通して、日本語の使用だけでは気付くことが難しい日本語の音声の特徴や言葉の仕組みへの気付きを促すことにより、日本語についての理解を深めることができる。さらに、このことは言葉の豊かさに関心させ、外国語学習への意欲の向上や、高学年の外国語科で育成を目指す資質・能力の向上にも資するものと考えられる。
 - 「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」とは、高学年以降の外国語学習における聞く力や話す力につながるものとして、児童の柔軟な適応力を生かして、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことを示している。そして、これらのことを「外国語を通して」行うことを明記している。これは、言語や文化について体験的に理解を深めたり、日本語と外国語との音声の違い等に気付いたりすることは、様々な方法が考えられるが、外国語活動は、「外国語を通して」という特有の方法によって、この目標の実現を図ろうとするものであることを明確にしたものである。

- 小・外国語
- 「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付く、これらの知識を理解する」という「知識」の面と、その知識を「聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能」という「技能」の面とで構成されている。（中高の外国語においても同旨の記載）
 - 「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付く、これらの知識を理解する」とは、中学年の外国語活動の「外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付く」に対応したものである。高学年の外国語科では、日本語との音声の違いにとどまらず、文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについても日本語との違いに気付くこと、さらに、気付きて終わるのではなく、それらが外国語でコミュニケーションを図る際に活用される、生きて働く知識として理解されることを求めている。
 - 「聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする」とは、中学年の外国語活動で外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませたことを踏まえ、「読むこと」、「書くこと」を加え、教科として段階を進めたものである。初めて外国語に触れる中学年の外国語活動において音声面を中心としたコミュニケーションの体験を通して、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんだことを生かし、高学年の外国語科では、中学校で身に付けるべき実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能の基礎的なものを身に付けることとなる。ただし、「読むこと」、「書くこと」については、中学年の外国語活動では指導しておらず、慣れ親しませることから指導する必要がある、「聞くこと」、「話すこと」と同等の指導を求めるものではないことに留意する必要がある。 48

(参考) 現行の学習指導要領解説 知識及び技能

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。	外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。

中学校

- ・「(外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを) 理解する」とは、基礎的・基本的な知識を確実に習得しながら、既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、学習内容の深い理解と、個別の知識の定着を図るとともに、社会における様々な場面で活用できる概念としていくことである。
- ・「(聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて) 活用できる技能を身に付ける」とは、一定の手順や段階を追って身に付く個別の技能のみならず、獲得した個別の技能が自分の経験やほかの技能と関連付けられ、変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能として習熟・熟達していくことである。(高等学校の外国語においても同様の記載)
- ・小学校の外国語科においては、「聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付ける」とあり、中学校の外国語科で身に付けるべき「知識及び技能」の基礎的なものを身に付けることとなる。ただし、「読むこと」、「書くこと」については、「読むこと、書くことに慣れ親しみ」としており、「聞くこと」、「話すこと」と同等の指導を求めるものではないことに留意する必要がある、中学校卒業時には、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」及び「書くこと」の技能を総合的に育成しておかなければならない。

高等学校

- ・「(外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの) 理解を深める」とは、新しい知識を確実に習得しながら、既存の知識や技能と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、学習内容の深い理解と、個別の知識の定着を図るとともに、社会における様々な場面で活用できる概念としていくことである。
- ・「(聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に) 活用できる技能を身に付ける」とは、一定の手順や段階を追って身に付く個別の技能のみならず、獲得した個別の技能が自分の経験やほかの技能と関連付けられ、変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能として習熟・熟達していくことである。
- ・また、中学校の外国語科が「実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能」としているのに対し、高等学校においては、「実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能」として、目的や場面、状況、相手の反応などを踏まえた上で、適切な語彙や表現などを選択して活用するために必要な技能を身に付けることとしている。

(参考) 現行の学習指導要領解説 思考力、判断力、表現力等

小学校 外国語活動

身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。

小学校 外国語

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

中学校

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

高等学校

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

- 「身近で簡単な事柄」とは、**高学年の外国語科と同様、児童がよく知っている人や物、事柄のうち簡単な語彙や基本的な表現で表すことができるものを指している。例えば、学校の友達や教師、家族などコミュニケーションを図っている相手、身の回りの物や自分が大切にしている物、学校や家庭での出来事や日常生活で起こることなどが考えられる。**また、中学校の外国語科では、「日常的な話題や社会的な話題」としており、これらは生徒の日々の生活に関わる話題や社会で起こっている出来事や問題に関わる話題のことを指している。中学年の外国語活動で身近で簡単な事柄について音声で十分にコミュニケーションを図っておくことが、高学年以降の外国語学習の動機付けとなり、更に話題を広げてコミュニケーションを図ることにつながっていく。
- 中学年の外国語活動では、伝え合う力の素地を「外国語で聞いたり話したりして」と、「聞くこと」、「話すこと【やり取り】」及び「話すこと【発表】」の三つの領域を通して養う**としている。一方、高学年の外国語科では、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと【やり取り】」、「話すこと【発表】」、「書くこと」の五つの領域を通して養うこととしている。これは、児童が中学年で初めて外国語に触れることに配慮したものである。また、中学校の外国語科では、「外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりする」としており、複数の領域を統合した言語活動を通して養われることとなる。
- 外国語教育においては、このようなコミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報や考えなどを、外国語で聞いたり読んだりして的確に理解したり、外国語を話したり書いたりして適切に表現し伝え合ったりする力を育成するため、資質・能力の三つの柱を踏まえた一連の学習過程の改善・充実を図る必要がある。ここでは、**中学年の発達の段階を踏まえ、身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を明示**した。
- コミュニケーションを行う際は、その「目的や場面、状況など」を意識する必要**があり、その上で、「身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりする」とともに、「音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、「自分の考えや気持ちなどを伝え合う」ことが重要になってくる。「思考力、判断力、表現力等」の育成のためには、外国語を実際に使用することが不可欠である。（中高の外国語においても同旨の記載）
- 「身近で簡単な事柄」とは、**中学年の外国語活動と同様、児童がよく知っている人や物、事柄のうち簡単な語彙や基本的な表現で表すことができるものを指している。例えば、学校の友達や教師、家族、身の回りの物や自分が大切にしている物、学校や家庭での出来事や日常生活で起こることなどが考えられる。**一方、中学校の外国語科では、「日常的な話題や社会的な話題」としており、これらは生徒の日々の生活に関わる話題や社会で起こっている出来事や問題に関わる話題のことを指している。小学校の外国語科で身近で簡単な事柄について十分にコミュニケーションを図っておくことが、中学校の外国語科で話題を広げることにつながっていく。
- 「推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたり」としているのは、**外国語科として言語能力向上の観点から言葉の仕組みの理解などを促すため、英語の文字や単語などの認識、日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き、語順の違いなど文構造への気付きなどが求められたことに対応したものである。「推測しながら読む」とは、中学年から単語の綴りが添えられた絵カードを見ながら何度も聞いたり話したりしてその音声に十分に慣れ親しんだ単語が文字のみで提示された場合、その単語の読み方を推測して読むことを表している。また、場面などを活用して読むことも考えられる。**例えば、動物園の絵のそばに添えられたzoo という単語があれば、音声で十分に慣れ親しんだ語を思い出して、zoo が読めることも考えられる。あるいは、book のbの発音を思い出して、bed を推測しながら発音することも考えられる。
- 「語順を意識しながら書いたり」とは、**中学年から何度も聞いたり話したりしてその音声に十分に慣れ親しんでいる基本的な表現を書き写す際に、英語で何かを表す際には、決まった語順があることへの気付きを踏まえ、語と語の区切りに注意してスペースを置き、それを意識しながら書くことを表している。**さらに、「自分の考えや気持ちなどを伝え合う」ことについては、聞いたり話したり、推測しながら読んだり語順を意識しながら書いたりして、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことの大切さを述べたものである。

(参考) 現行の学習指導要領解説 思考力、判断力、表現力等

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

中学校

- 言語は通常、人との関わりの中で用いられるため、他者を尊重し、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながらコミュニケーションを図ることが求められる。例えば、コミュニケーションの目的に応じて聞き手の理解の状況を確認しながら話しているか、相手の発話に反応しながら聞き続けようとする態度を示しているかなど、相手への配慮が求められることになる。これまでの課題を踏まえると、外国語教育の特性として「コミュニケーションを行う目的や場面、状況など」を設定し、生徒が理解し、外国語で表現し伝え合う力を育成するための学習過程の改善・充実を図る必要がある。（高の外国語においても同旨の記載）
- 「**コミュニケーションを行う目的や場面、状況など**」とは、**コミュニケーションを行うことによって達成しようとする目的や、話し手や聞き手を含む発話の場面、コミュニケーションを行う相手との関係性やコミュニケーションを行う際の環境のこと**を指す。こうした「**目的や場面、状況など**」は、**外国語を適切に使用するために必要不可欠である**。例えば、ある情報を得るために読む際には、単に一つの情報をうのみにするのではなく、他の情報と比べるなどして精査する必要がある。また、意見を述べる際には、考えを整理したり話す内容の構成を考えたり、相手に応じた表現を選択したりする。また、意見を述べる際には、考えを整理したり話す内容の構成を考えたり、相手に応じた表現を選択したりする。このように、「目的や場面、状況など」に応じた言語の運用を考えることで、「思考力、判断力、表現力等」が育成される。
- 「**日常的な話題**」とは、**生徒の日々の生活に関わる話題のこと**、「**社会的な話題**」とは、**社会で起こっている出来事や問題に関わる話題のこと**である。小学校の外国語科では「身近で簡単な事柄」を扱うのに対し、中学校ではこれらの様々な話題を取り上げることにより、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況など」をより幅広く設定することができる。
- 「**簡単な情報や考えなどを理解する**」とは、**コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、何を聞き取るべきなのか、読み取らなければならない内容は何なのか、を判断し、「聞くこと」や「読むこと」を通して情報や考えなどを理解すること**である。
- 「**これらを活用して表現したり伝え合ったりする**」については、**そうやって理解した情報や考えなどを整理した上で、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、何をどのように取り上げるかを既存の知識や体験などとも関連付けながら判断し、「話すこと」や「書くこと」を通して表現したり伝え合ったりすること**である。小学校の外国語科では、「自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力」とあり、中学校で身に付けるべき「思考力、判断力、表現力等」の基礎的なものを身に付けることとなる。

高等学校

- 「**コミュニケーションを行う目的や場面、状況など**」とは、**コミュニケーションを行うことによって達成しようとする際の目的や、話し手や聞き手を含む発話の場面、コミュニケーションを行う相手との関係性やコミュニケーションを行う際の環境など**を指す。母語でコミュニケーションを行うときと同様に、外国語で行う場合にも、読んだ情報を他の情報と比べるなど、目的に応じて情報を精査したり、相手に応じた話の内容、構成、表現などを選択するとともに、伝える内容を自らが的確に理解し、自分の言葉として表現したりできるようにする必要がある。
- 「**日常的な話題**」とは、**生徒の日々の生活に関わる話題のこと**であり、「**社会的な話題**」とは、**社会的な話題や社会で起こっている出来事に関わること**である。取り扱う話題の種類については中学校と大きな違いはないが、高等学校では、より深く多面的・多角的な考察が求められていることから、英語に関しても使用すべき語彙や表現などが高度化することが必要であることに留意しなければならない。中学校で扱った話題と同じ話題を扱う場合でも、生徒の発達の段階に応じて、生徒がその話題を自分のこととして捉え、主体的に考えることができるような、具体的に適切な設定が望まれる。
- 「**情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解**」するとは、**コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、何を聞き取るべきか、読み取るべき内容は何かなどを判断し、「聞くこと」や「読むこと」を通して情報や考えなどを理解すること**である。「**これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりする**」とは、**理解した情報や考えなどを整理した上で、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、何をどのように取り上げるかを既存の知識や体験などとも関連付けながら判断し、「話すこと」や「書くこと」を通して適切に表現したり伝え合ったりすること**である。高等学校の目標では、**中学校の目標の記述にそれぞれ「的確に」及び「適切に」が加えられているが、これは、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを踏まえて理解したり、話題や内容に応じた語彙や表現、論理性などに留意して表現したり伝え合ったりすることを示している。**

(参考) 現行の学習指導要領解説 学びに向かう力、人間性等

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

- ・ 中学年の外国語活動では、「言語やその背景にある文化に対する理解を深め」としたのは、学習対象である外国語などの固有の言語だけでなく、日本語も含めた言語の普遍性について体験的に気付くことが重要であることからである。母語以外の言語を学び、母語と外国語を比べることで、言語には普遍性と固有性があることに気付き、そうすることで母語の性質や価値、外国語の性質や価値をよりよく理解できるようになる。つまり、母語を、外国語を通して相対化することができるということである。このことは、児童の母語の力をより確かなものにするにつなげる。中学年の外国語活動においてそのようにして体験的に気付くことが、高学年以降の外国語学習への意欲につながると考えられる。
- ・ 「相手に配慮しながら」としたのは、言語は通常、人との関わりの中で用いられるため、他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながらコミュニケーションを図ることが求められることからである。例えば、聞き手の理解の状況を確認しながら話しているか、相手の発話に反応しながら聞き続けようとする態度を示しているかなどの相手への配慮が求められることになる。高学年の外国語科では、「他者に配慮しながら」としているのに対して、**中学年の外国語活動では、「相手に配慮しながら」としたのは、初めて外国語に触れることや、中学年の児童の発達の段階から常にコミュニケーションの対象となるのは、目の前にいる相手と限定したこと**からである。
- ・ 「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」とは、単に授業等において積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度のみならず、**学校教育外においても、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとするといった態度を養うこと**を目標としている。これは、学校教育法において、学力の重要な要素として「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう」、「主体的に学習に取り組む態度」を養うことを掲げていることを踏まえたものである。（小～高の外国語においても同様の記載）
- ・ 「言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」際には、（略）**これら全てを「外国語を通して」行うことを明記している**。これは、言語や文化について体験的に理解を深めたり、コミュニケーションを図ろうとする態度を育成したりするには、様々な方法が考えられるが、外国語活動においては、「外国語を通して」という特有の方法によることを表したものである。

- ・ 「外国語の背景にある文化に対する理解を深め」は、中学年の外国語活動において「言語やその背景にある文化に対する理解を深め」としていることを踏まえたものである。中学年の外国語活動では、学習の対象となる外国語のみならず、日本語も含めた様々な言語そのものへの理解や言語の背景にある文化に対する理解を深めることを求めている。そのような理解が、高学年の外国語科で、対象となる外国語の背景にある文化に対する理解の深まりへとつながる。
- ・ 外国語の背景にある文化に対する理解が深まることは、その言語を適切に使うことにつながる。また、言語を学ぶことは、その言語を創造し継承してきた文化や、その言語を母語とする人々の考え方を学ぶことでもある。更に、言葉を通じて他者とコミュニケーションを図り伝え合う力を高めることで、積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者と共感するなど互いの存在について理解を深め、尊重しようとする態度につながると考えられる。そして、このことは、言語能力の側面から「学びに向かう力、人間性等」を支えることになる。
- ・ 中学校の外国語科において、改訂前は、「言語や文化に対する理解を深め」とし、その「文化」を「その言語の背景にある文化」と解説していたが、今回の改訂により、「外国語の背景にある文化」とし、その意味合いを明確にしている。さらに、英語が国際共通語であることを踏まえると、外国語の背景にある文化だけでなく英語を使ってコミュニケーションを図る人々の文化についても理解を深めることが大切である。
- ・ 「他者に配慮しながら」とは、中学年の外国語活動では、「相手に配慮しながら」としていることを踏まえたものである。中学年の外国語活動では、「聞くこと」、「話すこと」を中心にコミュニケーションを図る体験をすることから、目の前にいる「相手」が対象となるのに対して、高学年の外国語科では、「読むこと」、「書くこと」も扱い、コミュニケーションを図る対象が必ずしも目の前にいる「相手」とは限らないため、「他者」としている。また、高学年の外国語科における、他者に「配慮しながら」とは、例えば「話すこと」や「聞くこと」の活動であれば、相手の理解を確かめながら話したり、相手が言ったことを共感的に受け止める言葉を返ししながら聞いたりすることなどが考えられる。なお、中学校の外国語科では、「聞き手、読み手、話し手、書き手」としているのは、五つの領域にわたってコミュニケーションを図る資質・能力をバランスよく育成することや、領域統合型の言語活動を重視していることなどからである。

(参考) 現行の学習指導要領解説 学びに向かう力、人間性等

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

中学校

- ・「外国語の背景にある文化に対する理解を深め」については、改訂前は「言語や文化に対する理解を深め」となっており、その「文化」を「その言語の背景にある文化」と解説していたことから、今回の改訂においてはその意味合いを明確に示した。また、「言語」を外して「（外国語の背景にある）文化に対する理解」としたのは、「コミュニケーションを図ろうとする態度」を養う上では、次に述べる「聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら」コミュニケーションを図ることが大切であり、その一つとして相手の外国語の文化的背景によって「配慮」の仕方も異なってくることが考えられるためである。併せて、外国語の学習を通して、他者を配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材を育てることも必要である。（高の外国語においても同様の記載）
- ・「聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら」については、（略）例えば「話すこと」や「聞くこと」の活動であれば、相手の理解を確かめながら話したり、相手が言ったことを共感的に受け止める言葉を返しながら聞いたりすることなどが考えられる。小学校の外国語科では「他者に配慮しながら」としているのに対し、中学校においては、五つの領域にわたってコミュニケーションを図る資質・能力をバランスよく育成することや、領域統合型の言語活動を重視していることなどから、特に「聞き手、読み手、話し手、書き手」としている。（高の外国語においても同旨の記載）
- ・改訂前は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」としていたものを、今回の改訂で「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」としたことに留意する必要がある。「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」とは、単に授業等において積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度のみならず、学校教育外においても、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとするといった態度を養うことを目標としている。

高等学校

- ・「主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」とは、授業等において積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度のみならず、学校教育以外の場面においても、生涯にわたって外国語の習得に継続して取り組もうとするといった態度を養うことを目標としている。
- ・高等学校では、中学校における「主体的」に加え「自律的にコミュニケーションを図ろうとする態度」としている。これは、外国語科の特性として、目標を達成するための言語活動において他者とのコミュニケーションが必要とされるが、学習内容等が高度化・複雑化する高等学校においては、授業等において言語活動を通して実際にコミュニケーションを図るだけでなく、それらのコミュニケーションを通して自分にはどのような力が足りないか、どのような学習が更に必要かなどを自ら考え、それぞれが授業での言語活動を充実させるための努力を授業外でも続けようとするより自律的な態度が一層強く求められることと関連している。